

東洋學の現状とその課題

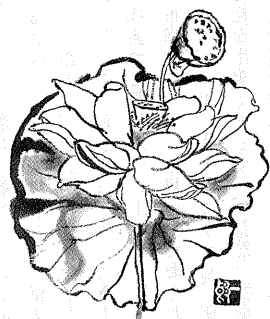
創立六十周年記念

出席

池田 田 溫
池田 秀 三
小川 裕 充
木田 章 義
条川 光 樹
齋藤 躬 明
桜井 由 雄
田仲 一 成
徳永 宗 雄

樹志司介廣夫郎
直武昌章忠芳
間下田井瀨川川
狹濱平村柳吉戸
(司會)

河 口 英 雄
五 十 嵐 洋 子



午後一時五分 開會

創立から現在まで

戸川 それでは、はじめにご挨拶をさせていただきます。

理事會をたびたび開いておるのですが、今回もその理事會に相當する規模の座談會を開かせていただくことになりました。議題は、「東洋學の現状とその課題」で、先々週の九月四日の常務理事會で皆様がたからいただいたアンケートをもとに、一應この進行次第を決めさせていただいた次第です。

提題は、「東方學會創立から現在までの概略」そこには創立頭初から現在までの歴代會長・理事長の學風を含めて、現在までの各種事業の實績報告のあと、日本學としての東洋學が東方學會の將來をトするものだと考えた次第ですが、しかしその前に、東洋學の理念について、それぞれのお考えを自由に發言していただくという形にしました。そのあとに、日本學についての東洋學、ないしは、東方學會における日本學の位置に關してご發言を願います。

後半には、情報化、それも國際的な學術情報の發信と受容の只中にある現在、國際交

流の一層の推進」と、IT時代への對應とを交えて、國際交流に實績を重ねてきたこの學會がその推進力を今後どのように發揮するかということをもまともに考えていきたい、と考えています。

最後には、學會經營の將來をどう考えるか、わたくしどもの學會は珍しく独自の財産を持つてある程度經營することが可能なので、どれぐらい利殖できるのか、どういう方向へこの學會を豊かにしてもっていくか、ということも、いろんなご案をいただければ、と思っております。

いずれにしても、東洋學とかアジア研究とかいった漠然と廣がって果てのない對象について、いま六十周年を迎えたこの學會として、何をなすべきかお知恵を大いに拜借する機會となる座談會となれば幸いと考えています。

そもそも本學會は、池田會長からお話のすることですが、戦前の東方文化學院・同研究所の理念を受け継ぎ、戦後、名稱も「The Institute of」を受けて結成されました學會、いわば研究センターでありまして、それも外務省からすでに建物付きの資産豊かな保證があった、と伺っております。ただ、發足

当初は、その建物は、戦中からの大陸の留學生がまだずっと占據し、彼らの生活の場でもありましたので、研究所の機能は果たさず、羽田亨先生たち創設者は、反って東方文化研究を代表する戦前からのトップクラスの研究者を推挙するサロンを目論んでおられたのではないかと、思います。ですから、研究生活の餘裕が出来てきますと、當然、推薦された研究者を集め、論集も編輯され、戦前から得意の歐米學術との情報交換が始められたのだ、と思っております。サロンの参加者は、数からは東洋學・シナ學のメンバーが多く占めたでしょうが、伊東忠太・湯川秀樹・高田修・辻直四郎といった方々が頭初から加わっております。

この點、この學會は科研費の分配審査のため結集した日本中國學會や同業者集團の中國語學會などと成立事情が異なり、會員相互の推薦制を維持している高級サロンのイメージが私には抜けません。初期創設者たちの高邁な斯學のエリートたち、そういった先生がたのイメージが私ども新制大學を出た世代には、常につきまっとて來ました。

つづいて、會長、理事長のご業績が紹介されると思いますが、この會は、いま申しまし

た意味で、いずれかの出身母體を代表した集合團體などではなく、東方文化研究の一エリートとしての見識による學會運営がずっとはかられてまいったものと思っています。石田幹之助先生、吉川幸次郎先生によって象徵されるように、豊かな文人的感性と深い學殖により、比類ない學會に仕立てあげられたものです。

まずは池田會長の方から、東方學會の創立から現在までの概略と歴代會長、理事長の學風につきましてもご紹介いただきます。

池田(溫) 東方學會創立から現在までの概略史といっても、とても簡単に述べられることではないわけですが、創立二十周年、つまり三十九年前ですが——その記念座談會というのが「東方學」第三十四輯に出ております。そこに「創立期の東方學會を語る」ということで、初期の二十年間について、宇野哲人、石田幹之助、吉川幸次郎、鈴木俊、その四名の先生がたと司會の石田一郎先生の、五名で語られたものがあります。それから、今から三年ばかり前に、服部正明先生、前の理事長が「任を終えて」というのを「東方學會報」八十五號に、これは三ページばかりのものです。が、わが東方學會が近年どういう點に

力を入れてきたかというようなことにも觸れられていて、最近の指導者のお考えがここにも窺われます。

それから、これは十年近く前に、五十周年に当たっての『創立五十周年記念東方學論集』が出まして、多くの先生がたが、それに寄稿されて、みなさまご承知かと思いますが、高崎直道先生がその跋文で、五十年間の東方學會の歩み、發展というようなことを要約して紹介されております。その一部を讀ませていただきますと、「本學會」つまり東方學會は、「當初、外務省の肝いりで、第二次世界大戰末期に大東亞省所管の文化事業團體として設立された日華協會」——要するに日本と中國の間に設けられた協會で、「この事業を引き繼ぐという形で計畫された」のです。ですから、これは終戦以前のことから始まっています。

「その目的は、戦後の日本社會の建て直しに呼應して、廣く東洋關係諸學の學者を集めて」、「わが國の東方學研究の發達を圖り」、「二番目「その學術的成果を以て東方諸國……」というのはアジア諸國と言ってもよろしい」、「……の文化の進展に貢獻するとともに」、「さらに三番目、「進んで世界學界との連絡・提携を促進し、廣く國

際文化の交流に寄與すること」にあった、というように、「東方學會要覽」に書かれていたのを引用されております。

「こうして西神田の現在の地にあり日華協會の建物と土地を外務省から譲り受けて本部とし、その地はここです、「そして東京と京都に支部を置く形で、東方學術協會として發足した」最初は東方學術協會という名前が始まったのです。「これが一九四七年六月二四日のことです。その後、同名の團體が既に他にあることがわかり、翌一九四八年に東方學會と名稱を改めて今日に至っている。」まあ、五八年ぐらい東方學會と言ってきたもので、その前に別の名前だったなんていうことはもうほとんど記憶から薄れているようですが、「この東方という名稱は、義和團事變」十九世紀末の、ボクサーライジング、「その賠償金によって、外務省が設立した東方文化學院」は、東京が東方文化學院東京研究所、京都が東方文化學院京都研究所その「名稱を受け繼いだものと思われる」と。そういうところから「東方」という名前が關係者の頭に廣くしみ通っていた、ということかと思えます。

「それは後に東京大學東洋文化研究所、そ

れから京都大學人文科學研究所東方部となつたが」とありますが、東大東洋文化研究所は、一九四一年東大の附置研として独自の研究所が設けられ、それが敗戦後、東方文化學院を吸収して合體しましたもので、京都も一九三九年設置の大學附置研人文科學研究所に、戦後吸収されました。

いずれにしても、東方學會の英文名は頭初より The Institute of Eastern Culture であってこれは現在も使われている名前です。

會長・理事長

池田(溫) 東方學會の運営は理事會によって擔われており、この理事會を代表するのが理事會で互選される理事長である。なおその上に學會創設時の羽田亨會長以來現在に至るまで、計九名の會長が理事會によって選任されてきた。本學會創設時、會員は理事會推薦により東京支部二五〇名・京都支部一五〇名で發足、理事會は全五名(宇野哲人理事長・石田幹之助・和田清・吉川幸次郎・梅原末治)、監事二名(貝塚茂樹・結城令聞)で始まったが、數年後に辻直四郎・宮崎市定(第四期から)、石田一郎(第五期から)、つ

會長（在任期間）	
初代	羽田亨 1882-1955 (1947-55)
二代	宇野哲人 (1963-73)
三代	石田幹之助 1891-1974 (1973-74)
學問の思ひ出 (「同」二九、三二)	
四代	吉川幸次郎 (1975-80)
五代	貝塚茂樹 1904-87 (1981-85)
六代	山本達郎 (1987-93)
七代	神田信夫 1921-2003 (1993-99)
八代	高崎直道 (1999-2005)
九代	池田溫 1931- (2005-)
理事長（在任期間）	
初代	宇野哲人 1875-1974 (1947-67)
二代	吉川幸次郎 1904-80 (1967-1975)
三代	山本達郎 1910-2001 (1975-85)
四代	護雅夫 1921-96 (1985-1991)
五代	高崎直道 1926- (1991-97)
六代	服部正明 1924- (1997-2003)
七代	戸川芳郎 1930- (2003-)

いで第八期に岩生成一・鈴木俊・長尾雅人三名が加わり、貝塚が監事から理事に移り、田村實造が監事に就任、第九期に宇野哲一が理事に就任した。

現在の會員一五〇〇餘名、理事一八名（うち常務理事五名）を算するのを見ると、本學會の六〇年間の量的發展が實感されよう。

右表に見られるように七名の理事長のうち四名まで後に會長に選ばれており、また理事

長を経ない會長も以前はみな理事に任じていた。本會の理事長と會長は、いふなれば一般の會社の社長・會長に相應する存在とみて支障あるまい。

次に東方學會を代表する右掲一二名について、各人の選考分野をみるなら學問領域では○哲學・思想・宗教○宇野・高崎・服部・戸川○歴史○羽田・山本・護・石田・貝塚・神田・池田○言語・文學○吉川

（四五）、貴族院議員（一九四五—四七）などの要職に任じ、ジュリアン賞・文化勳章の榮譽に輝いた。敗戦後の混亂の中で豊富な體驗と人脈を活かし、學界再編に努め外務省所管東方學會創設に盡力、初代會長となったのである。生前の居宅は京大に寄付され、ユーラシア文化研究センターになっている。（*主著『西域文明史概論』一九三二、『西域文化史』一九四八『羽田博士史學論集』上・下一九五七、五八 *資料『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』一九五〇、追悼録『東洋史研究』一四—三、一九五五と本誌二一、一九五五）

宇野哲人*先生は東大で島田重禮・井上哲次郎（巽軒）・根本通明に學び「二程子の哲學」を井上にリポートとして提出し、認められる。清國一九〇五—七、〇八一—〇ドイツ留學。東京高師・東大で多年教學に従事、三九—四五中華民國北京大學名譽教授、四五—四八東方文化學院院長。ヴィンデルバンドの文化價值哲學を参照して中國哲學史をまとめた。九十九歳の長壽を達成、著作と後進の育成に努め學界の耆宿と仰がれた。（*主著『支那哲學史講和』一九一四、『二程子の哲學』一九二〇、『儒學史』上—一九二四、『支那哲學の研究』（増補改訂版）一九二九、『支那哲學史—近世儒

學史』一九五四 *資料『宇野哲人先生白壽祝賀記念東洋學論叢』一九七四、『宇野哲人先生に聞く 末延三次・赤塚忠「學士會月報」七一八、一九七三、『一筋の道百年』一九七四、本誌四八、追悼録、一九七四）

石田幹之助*先生は「東方學」誌の生みの親が羽田亨先生とするならば、育ての親は石田幹之助先生と、言えるでしょう。羽田先生同様に白鳥庫吉博士の教えを受けて、三〇年にわたり博士に親侍され、その影響は石田先生を單なる文獻中心の歴史學者にとどまらず、考古、地理、民族、哲學、宗教、神話、傳説、言語、書誌、文學、民俗、美術、動植物の諸學に通じ、歐米人の東洋學研究を詳説して、『歐人の支那研究』（一九三二）『歐人に於ける支那研究』（一九四二）を著された。本誌にも第一輯から四十七輯まで『海外東方學界消息』欄を連續執筆された。先生でなくては爲しえない仕事であったと言えます。また、先生はイラン文明の東方傳播を見通された。その東方の基點、世界文化の集中する唐の都長安のさまをみごとに描いた『長安の春』があり、廣汎な讀者に愛讀された。（*資料『著作集』四卷、一九八五—一六、『石田博士頌壽記念東洋學論叢』一九六五、榎一雄

對象地域では

○東アジア○宇野・吉川・戸川・貝塚・神田・池田 ○内陸アジア○羽田・護・石田 ○南アジア○山本・高崎・服部のようにみなされよう。ただこの分類は常識的便宜的なもので、名譽會長山本達郎に典型的にうかがわれるように、ディシプリンにまたがり、ひろくアジア、更には全世界を對象とする雄大なスケールの研究者が目立つ。この點は本學會の誇るべき特性と稱して過言でないであろう。以下各人について簡単に紹介する。

羽田 亨*先生は東大で白鳥庫吉の學問的影響を受け、歐・露に留學、西域史專攻。漢語はもとより西域のアルタイ系・イラン系諸言語に通じ、『永樂大典』所收『經世大典』站赤條を活用し、『蒙古驛傳考』『元朝驛傳雜考』により中世に於けるユーラシアの交通路・交易・文化交流に透徹した見通しを提出。パリでP・ペリオと敦煌文書の研究を共同研究を行い、歸國後京大東洋史學科を多年主宰し、東洋史研究會會長として日本のアジア史研究の成長を領導し、多數の優れた東洋史研究者を養成した。行政面の能力も高く、學士院會員（一九三六—）、京大總長（一九三八

「解説」（『増訂長安の春』一九六七）、本誌四九、追悼録）

吉川幸次郎*先生は、その學風について小川環樹先生が「吉川先生の學問の特色」という題で追悼文を書いておられ、それは「博士はしばしば『私はフィロログです』と、言われることがあった。」その學問の根底には透徹した文獻解釋があつて、これを中國中世及び近世の經學者の著述から學ばれた。經學はもとともと經書すなわち中國古典、の解釋學です。先生は東方文化學院京都研究所、のちの東方文化研究所での重要な仕事として『尚書正義』の校定と完全な和譯に従事され、『尚書正義』と譯本がその成果です。次に取り組まれた「元曲」の研究は經學の解釋方法を文學へ適用したものであった。「ここで言われるその學問の『態度』は『經學』を『文學』の二字に置きかえれば、そのまま博士の文學研究の態度であり、目標となる。」と。晩年に心血を注がれた『杜甫詩注』においての態度も、その根幹を成すのは用語の解釋のためのためなく積み重ねられた考證と、その深趣を把握する洞察力とで解釋が導き出されている。それが吉川先生の學風といえましよう。二十世紀後半日本の中國研究の

代表的成果と稱して過言でないと思存します。
文化功勞者一九六九。(※主著『吉川幸次郎全集』全二八卷、『杜甫詩注』全五冊、一九七七八三) ※資料本誌六一、追悼録、一九八一

貝塚茂樹*先生は吉川先生のつぎに會長を務められました。貝塚先生の學風については、山本達郎先生が追悼文で、その學者としての活動は中國史の最古から現代に及び、人文・社會の諸領域にわたり、細かい特殊研究あり、他方、概説があり、一般讀者向きの文章も多く、驚くべき多面性をそなえている、と。一方、同じく追悼文の中で、藤枝晃先生は、貝塚さん自身は甲骨・金文に限らないで、『孔子』『諸子百家』など古代諸思想家から『毛澤東傳』に至るまでの人物傳記を著し、更に中國史以外の分野にまでも及ぶ著述範圍の廣さと趣味の多様さを指摘されるが、その本領はやはり古代史とくに甲骨・金文の學にあるとして、著書『中國古代史學の發展』の最大の功績は、甲骨文・金文が殷周史の基礎史料たりうることを、従来は金石學や古文字學の材料でしかなかった甲骨文・金文を現代の史學研究の根本史料にたえうる古文獻の域まで整理活用された、その視點と方法の卓越さを指摘している。文化動章一九八四。

(※主著資料『著作集』十卷、一九七六—八、本誌七四、追悼録、一九八七)

山本達郎*先生は滿鮮史の池内宏、中國社會經濟史の加藤繁、滿蒙史の和田清の諸教授に指導を受けられ「鄭和西征考」が卒業論文でした。ヴェトナム史研究の大著『安南史研究』一・元・明兩朝の越南征討支配と在地勢力の抵抗獨立の経緯を詳細に追及。のち東大インド史蹟調査團團長としては、インドデリー地區を中心にデリー諸王朝時代のモスク・墳墓・水利施設の實地調査を行い、アジア史の廣汎な領域に互る研究を進め、一方、敦煌籍帳の研究—四至記載の綿密な分析—そして農民各戸の私田所有の様相を明らかにされたが、同時に「敦煌發見戶制田制關係文書十五種」や『*Tunhuang and Turfan Documents Concerning Social and Economic History* (シリーズ四種) など関連史料の學界への提供に盡力され、中年以後は歴史理論や比較史研究の分野にも論及された。その國際的學界活動は際立っており、UIEOA・CIPS H會長をはじめ、幾多の要職に任ぜられ、日本の東方學の發展にはかりしれぬ貢獻をされた。文化動章一九九八。(※資料『山本達郎傳

士古稀記念東南アジア・インドの社會と文化』上・下、一九八〇、『山本達郎著作・研究發表目錄一九三三—二〇〇一』、本誌百二、追悼録、二〇〇二)

護雅夫*先生は白鳥庫吉、羽田亨兩博士の傳統のある研究成果を受け、さらに和田清、安部健夫兩先生の強い勧めで突厥史研究に進まれました。先生の研究方法は漢文文獻に加えて、イスタンブール大學のトガン教授、アラト教授やアンカラ大學のテミル教授、ハンブルク大學のフォン・ガバイン教授に古代チュルク語、オスマン語、トルコ史の指導を受け、古代チュルク語、ルーン文字資料の文獻學的研究などに力を注がれ、トルコ史、特にトルコ(チュルク)民族を中心とする内陸アジア遊牧民族の歴史學的・民族學的研究、オスマン・トルコの歴史・研究に向かわれた。まず遊牧國家における即位儀禮をシャーマニズムの儀禮と解釋し、古代遊牧國家が「部族連合國家」であることを提唱された。この見解は今や内外のトルコ民族史研究者の間の定説となっています。また、大谷探検隊や諸外國隊將來のウイグル文の消費貸借文書や賣買文書を解讀し、その形式や文言に中國文書の影響が見られることをいち早く指摘されました。

た。またモンゴル帝國の國家内部の主従關係の解明を進め、従来のウラジミルツォフの「遊牧封建制論」説では説明し得ない事を證明し、モンゴルの主従關係がいわば「家産的支配・隸屬關係」であることを示し、これら遊牧社會の發展に關する獨創的な見通しを踏まえて、複雑な内陸アジア史の整理を試みられた。さらに先生の研究對象はトルコ民族の移動に従い西方へとひろがり、イスラム化した後のトルコ民族史に及び、それはオスマン・トルコの國家構造・社會構成、イスラム世界・オスマン・トルコの近代化、改革運動さらにはトルコ革命にまで及ぶものでした。

(※主著・資料『古代トルコ民族史研究』全三冊、一九六七—一九九七、本誌九四、追悼録、一九九七)

神田信夫*先生は、家學の漢學、書誌文獻學の素養に加え、滿族史・清朝初期史に打込まれました。百八十卷に及ぶ「滿文老檔」の譯注に取り組み、松村潤・岡田英弘氏らと協力して、全七冊、約三、〇〇〇頁の大著を完成(一九五五—六三)、續いて臺北の故宮博物院より「舊滿洲檔」と題する原資料の影印本が刊行されると、直ちに「滿文老檔」に洩れている天聰九年檔の譯注本を作製刊行し、

大陸中國との交流が可能となると、北京の中國第一歴史檔案館に所蔵されている、「滿文老檔」と同じ性格の「内國史院檔」の研究に當たられ、「天聰八年檔」の譯注を二〇〇三年、亡くなられる一年前に刊行されています。他方八旗鑲紅旗檔案を整理し、雍正・乾隆朝三冊を松村・岡田・細谷良夫氏と共編され、又一般向けに「滿學五十年」を著し、主要論文は『清朝史論考』(二〇〇五)にまとめられた。

(※資料『神田信夫先生古稀記念論集—清朝と東アジア』一九九二、『神田信夫先生—足跡とお仕事』二〇〇四、本誌百八、追悼録、二〇〇四、

『傷逝—神田信夫先生追悼文集』二〇〇五) 高崎直道*先生は戦後いちはやくインドのプーナ大學に留學、『實性論』のサンスクリットテキストの研究で一九五九年に同大學から博士號を取得されるとともに『如來藏思想の形成』を一九七四年に出され、これにより日本學士院賞を受賞された。この研究は先學のD. S. Ruegg *La Théorie du Tathagagar-bha et du Gotra* (Paris 1969) と併せて、如來藏思想研究の文獻學的研究はこれを以て一應終止符が打たれた観があると評されている。更には『如來藏系經—大乘佛典』、『楞伽

經—佛典講座』、『佛教入門』(一九八三刊)その英文版 *An Introduction to Buddhism* (1987) があり、佛敎學研究のリーダーとして國際的に活躍されております。(※資料『高崎直道博士還暦記念論集—インド學佛敎學論集』一九八七、『日本學士院紀要』三三一、一九七五)

服部正明*先生のご専門は古代インド哲學・宗教思想の廣い領域にわたっておりすが、とりわけ認識論・意味論を中心とする古典期の諸哲學體系に詳しく數多くの業績を上げられています。また、大乘佛敎の唯識に關しても、この思想を古代からの觀念論の系譜やヨーガの傳統と關連付け、他の諸哲學體系と對比してインド思想史の立場から解明され、その成果を『認識と超越—唯識』にまとめられました。先生はまた、インド哲學の源流であるウパニシャッドやヒンドウー敎の經典にも造詣が深く、主要ウパニシャッドの抄譯、宗教詩『バガヴァッド・ギーター』の翻譯『ウパニシャッドの概説書』『古代インドの神祕思想』などを通じて、インド思想に關する正確な知識の普及に努められ、そのほか『*Dhyana, on Perception* (HOS, 1968) を始めとする多數の研究成果を英文で發表さ

れ、日本のインド思想史研究を國際的レベルに高め、また、國際學界をリードしてこられました。先生のその學風は極めて嚴密な文獻實證主義にあると言えます。（*資料提供徳永宗雄）

戸川芳郎*現理事長は一九三一年大阪市生、五一年東大教養學部入學、工藤篁先生に漢語を學び中國文學科に進學、倉石武四郎先生らに學び五五年卒業。大阪府立高に勤務し、五八年京大大学院に進學、中國哲學史專攻、重澤俊郎・吉川幸次郎・小川環樹諸教授の薫陶を受け、修論は「中國における古代的思维に關する一考察——主として上古漢語の諸特徴よりとらえた〈前論理的思维〉の樣相について」。六三年東大教養學部中國語教室助手、六五年お茶の水女子大文教育學部助教、のち東大文學部に移り助教・教授・文學部長を務め名譽教授となり、つづいて二松學舍大教授となり、現在は名譽教授。東大・京大兩校に在學した稀有の存在で、日本中國學會・中國社會文化學會等をリードしてきました。

主著『漢代の學術と文化』（研文出版、二〇〇二）。漢魏思想史を專攻するが、ひろく經學、漢語學に通じ、漢字文化を上代語に遡

って細檢し、傳統訓詁學に新しい視點から分析を加え、東大はじめ諸大學で多數の後進を育成されている。理事長として異常の熱意を傾けて會務を統括され、自宅書齋がわりに學會事務室で執筆、應接等に當られることが多い。（*資料「中國哲學研究」（東大中國哲學研究會）第四—戸川芳郎教授退職記念特集、一九九二、「わたくしの中國學」（中國—社會と文化—第一八、二〇〇三））

私自身のことですが、池田溫は一九三一年靜岡生、東京で育ち一九五四年東大東洋史學科卒、卒論は「楊堅の出自」、大學院に進み山本達郎・榎一雄・西嶋定生・周藤吉之・江上波夫・松本善海諸先生に學ぶ、修論「唐代均田制の一考察」（西嶋指導）、六一年單位取得退學。東洋文庫研究生として大英博藏スタイン文書の焼付點檢に従事、敦煌學の世界に參入。六四年北大文學部助教、七一年東大東文研助教、教授・所長で九二年定年退官。一年半北京日本學センター勤務、九三年創價大教授、〇七年退職、四十餘年の教職を終える。其間著書『中國古代籍帳研究概観・錄文』（一九七九、龔澤銑譯、一九八四）、『中國古代寫本誦語集錄』（一九九〇）、『唐研究論文選集』（一九九九）、『東アジア

の文化交流史』（二〇〇二）、『敦煌文書の世界』（二〇〇三）、編書は『大唐開元禮 附大唐郊祀錄』（一九七二）、『敦煌の社會』（講座敦煌三、一九八〇）、『中國禮法と日本律令制』（一九九二）、『敦煌漢文文獻』（講座敦煌五、一九九二）、『古代を考える 唐と日本』（一九九二）、『世界歴史大系 中國史2 三國（唐）』（松丸・斯波・神田・濱下共編、一九九六）、『唐令拾遺補』（仁井田陞著、編集代表、一九九七）他。

さて學會は始めから東京、京都における定期講演會を主な行事とし、理事がもっぱらその運営に當った。會員は推薦制で、大學の講師以上に資格を限定し、會費は取らない方針であったがこれは最初の間の短い期間の方針で、後に會費も取るようになりますし、それから大學院の院生にも會員資格を與えることになったことは、ご承知のとおりです。

そういうことで、一九五一年三月に『東方學』誌が創刊され、その秋に第一回の會員總會を開催する運びとなりました。學會としての體裁が整えられたのです。「東方學」はその後ずっと繼續して刊行されていることはご承知のとおりで、既に百號を超えておりま

す。いま百十二輯ですか。そのほかの出版物としては、ご承知のように ACTA ASIATICA という英文誌で、年間の日本における東洋學というか、アジア研究の主要な成果、重要な論文を理事が編集して數篇集め、それを英譯したものが、出されております。世界各地のアジア研究の機關、大學、圖書館等に寄贈され、もちろん國內の主要研究機關にも寄贈されております。日本のアジア研究、殊に人文社會科學系のものについての、國際的に代表的な紹介誌として、いまや定着しているものと思います。そのほか、毎年開かれる國際東方學者會議 ICES のプロシーディングス「紀要」としてこれも毎年出されておりますし、それから「東方學關係著書論文目錄」も四三年間續けて刊行しておりましたのですが、先年財政的な理由で休止せざるを得なくなりました。將來ふたたび編集刊行してほしい、というような要望がねぶよくあると聞いております。そのほか、先ほど觸れました五十周年の前にも、創立十五周年、それから二十五周年、四十周年にも『東方學論集』という重厚な論文集を刊行してまいりました。

會員數も初めは一〇〇名餘りから始まって

おりますが、現在一五〇〇數十名にのぼっております。出版物の數量、質ともにだんだんに高まってきました。それから年間二回「東方學會報」を出版しております。そこには學界動向、あるいは最近開かれた關係ある國際學會などの紹介のほかに、「會員からの通信」欄があり、最近では一〇〇名以上の近況の通信が寄せられています。最近こういう研究をしている、あるいはこういう職についていた等々のことで、一割弱ですけど、學會の現在の動きをこれによってよく知ることができます。國內の學會でも、こういった形で會員からの便りを相互交換しているという例はほとんど知りません。そういう點でも、東方學會の今までの事務局のご努力には、我々大いに感謝したいと思つてゐる次第です。

五〇年で『記念論文集』を出しましたけれども、六〇年目では論文集を出すのはやめて座談會をやらうということ、きょうの集まりになったわけですが、これは本學會の運営に責任を持っておられる理事の諸先生に、今後の東方學のあり方、學會の行き方について、自由闊達に發言していただければ、それが六〇年を節目に、現在の東方學會の一つの指標として、會員の皆さんにも示唆を與える

ことになるのではなからうか、という考えに出た次第です。

現在までの各種事業の實績報告

戸川 さてその後、六〇年續きました本學會の果たした事業につきましては、事務局の方からその實績の報告を、お話しただけだからと思っております。

柳瀬 先ほど會長のお話にもありましたように、東方學會は學會ではありませんけれども、それと同時に財團法人という法人格を與えられた公益法人の事業體でありまして、事業體である以上は事業計畫を策定してそれに従つて事業を展開していく、こういうことが義務づけられるわけがございます。東方學會としては、創立以來東洋學の普及と一般公開ということを視野に入れて、特に國際交流という面に重點を置きまして、多角的に事業を展開してきたわけでございます。これまで約六〇年に及ぶ實績をこれから數の上で報告させていただきます。數字上の報告にすぎないわけですが、まさに繼續は力だと私は思いました。その數字の一つ一つに非常な重みがあるのではないかと感じております。長年にわたって各種事業の實施、實務を擔當し

てきました事務局としましては、これらの数字というのは極めてインプレッションで貴重なものであると思っております。

それで思い出しますのは、先ほどの創立二十周年記念座談会の中で、當時理事長を務めておられた吉川幸次郎先生が、「今『東方學』は何冊目になるかね」という御下問がありまして、「第三十四輯が出るところでございまして」と申し上げましたところ、「そうすると一輯に一〇篇載せたとして、四〇〇近い論文を學界に送ったことになりませんか。この功績は非常に大きいと思います」と言われましたことをはっきり覚えております。それに對して宇野（哲人）老先生が、「本當にこの功績は大きいですね」と相づちを打っておられたことを思い出します。

量の増大というのは必ず質の變化をもたらすという言葉がありますけれども、そのとおり各種事業、次第に飛躍的に質的向上を見せまして、いろいろな事業面で非常に内容の高いものを今やっているわけですが、その一つの例として国際東方學者會議がございまして、これは第四十四回會議から開催方式を變えまして、そのために非常に企畫性の強い現在の東洋學あるいは日本學の最高レベルに

基づく研究活動が展開されて、既にもう内外から廣く注目を集めているところであることはご承知のとおりであります。

また東方學會の設立時期は、やはりシノロジを中心とした學會であったわけですが、でも、その後、次第に日本研究というものがつけ加えられてまいりまして、現在では學會内における人的構成も整いつつありますし、研究成果は国際東方學者會議（ICES）、あるいは英文誌 ACTA ASIATICA 等に反映されておるところです。

この詳しいことは、現在「創立六十周年記念東方學會出版總目錄」と「財団法人東方學會六十歩み」というものを今準備中でございまして、これらの冊子を來年六月の記念大會の参加者にお分けする豫定です。これを見ていただくと、研究論文の内容、そういつたことが一目瞭然に詳しくわかるようになっております。

では、これから五十嵐洋子さんと河口英雄さんに分擔してもらいまして、それぞれの事業面における数の上での実績報告をしてもらいたいと思います。では、五十嵐さんから始めてください。

五十嵐 編集にかかりました「東方學」

八年刊の十六輯まで續いています。それに三年間重複するのですが一九五七年刊の十三輯に Books and Articles on Oriental Subjects Published in Japan during 1955（『東方學關係著書論文目錄』）に收められ、一九五八年版を一九五九年刊の「東方學」十九輯に収めています。

一九六二年刊の第二十四輯に始まった座談會の欄は宇野哲人先生の「學問の思い出」からです。これは宇野先生が米壽を迎えたことを記念して行われ、この座談會を契機に「學問の思い出」の欄が設けられたことが伺われます。それが現在まで續いて最近の百十二輯掲載の荒松雄先生で三八名を数え、全て「東方學」に収載してまいりました。

そして一九七二年、四十四輯に掲載の白鳥庫吉先生を第一回目として取り上げた「先學を語る」は、最近の百十一輯に收められた西嶋定生先生まで五〇名の方々を取り上げてまいりました。ですから座談會は總計しますとこれまでに八八名の方々について實施し収録しております。座談會で個人を取り上げてゐる以外に「東方學」第三十四輯に收められている「創立二十周年記念座談會」が一篇あります。それを加えますと八九篇となります。

や「記念論集」に掲載しました論文及び「内外（海外）東方學界消息」記事の篇數を中心報告させていただきたいと思ひます。

「東方學」は、一九五一年に第一輯が刊行され二〇〇六年の現時點第百十二輯までで論文が九七九篇、學界消息が二二四篇發表されました。それから一九五四年～一九五五年一年間で二二篇の論文を收めて『東方學論集』が三冊に分冊されて出ております。それから一九六九年に刊行された『東方學創立十五周年記念東方學論集』には三〇篇を收め、一九七二年に刊行された『東方學創立二十五周年記念東方學論集』では四八篇、一九八七年に刊行の『東方學創立四十周年記念東方學論集』では、六一篇の論文を收め、一九九七年刊行の『東方學創立五十周年記念東方學論集』には九篇を收め刊行されました。これら發表された論文の言語は日本語によるものですが、例外的に中國語による論文が一篇收められています。これらを總計しますと全部で一二三九篇を数えます。論文のほかに「東方學」に收められている翻譯論文は海外から招聘した研究者の講演のフルペーパーをも含めて四一篇、それから、同誌掲載の「海外東方學界消息」欄を當時「東方學」の編集

す。先ほども話が出ましたが現在休刊となっております。『東方學關係著書論文目錄』（英文版）は、一九五四年版を第一冊として一九九五年版四十二冊まで刊行されました。これは今後はネットを利用する方向で再開したいというふうに願っております。

それから「東方學」に關連いたしました、東方學會賞ですが、一九八二年を第一回として本年度の平成十八年度の二五回目をむかえ、すでに五八名の方々を受賞されています。

以上が私の方からの數字上の報告でございます。

河口 續きまして、その他の事業を出版と交流に分けてご報告いたします。

出版では ACTA ASIATICA、先ほどから出ておりますけれども、創刊は一九六一年、今年七月刊行の九十一號までで論文數は四〇五篇、研究誌を四八篇掲載しています。

また、「國際東方學者會議紀要」は一九五七年に第一冊が出まして、昨年の十二月で五十冊まで、フルテキストの數が二二九篇、發表要旨、初期のころは和文のものも少しまざっておりますけれども、トータルで一四八七

長の石田幹之助先生が第一輯から第四十七輯までお一人で執筆されました。その後四十八輯からは榎一雄先生が第七十三輯まで執筆あるいは編集を擔當されました。「東方學」の編集方法が従来は理事會が編集會議を開催して論文の採否の決定を行うというやりかたでしたが、一九八五年刊行分の七十輯以降は編集委員會が組織され、全ての應募論文をそれぞれの分野を専門とする査読者の評價と意見を得、それらをふまえたうえで編集委員會が掲載を決定するやり方に變まりました。學界消息についてもそのころに榎先生が急逝されたために、それ以降は論文同様に執筆についての依頼を編集委員會が決定することが原則となって現在に至っています。第一輯から現在の百十二輯まで二二四篇を収めています。なお、この欄の見出しタイトルを第九十六輯から日本の國內でもいろいろな國際會議が開催される今日の状況にあわせて海外から内外東方學界消息に變更しました。これは服部正明先生のご意見によるものです。また、第一輯から海外の學界に對して國內の東方學界について「戦後國內の東洋學界の概況」から「我が東洋學界の近況」と名稱が變わっておりますが、和田博徳先生が擔當されて一九五

掲載しております。

「東方學會報」は、一九五八年にナンバー一が出まして、こゝし八月刊行のナンバー九十まで出ております。ここには「研究室便り」というのを地區委員の先生方にお願ひして所屬されている大學の各専門分野の研究組織と状況についてご執筆いただいでいます。これは一九六六年の十號からこの企畫が始まり、三九の大學あるいは研究機關について、今現在六四回掲載しています。ですから今ちょうど二順目に入っているところで、大體二十年前のものとは比べながらお書きいただいているという形で進んでいます。

「會報」でも一つ特集形式で掲載していますのが、ICANAS（國際アジア・北アフリカ研究會議）の参加記事で、ナンバー二十四の第二十九回のパリ會議以降参加された先生方にその會議の様子をご報告いただく形で記事を書いていただき、二〇〇四年のモスクワ會議まで八四件の報告記事を掲載してまいりました。

それから、國際交流基金から委託を受けて編纂業務を行っております An Introductory Bibliography for Japanese Studies ですが、これも一九八六年五月に國際交流

基金の要請を受けまして、理事會で受諾を決して、VOL. 6, Part 1 の書目は Part 1 が社會科學篇、Part 2 が人文科學篇ということ

で構成されており、Part 1, Part 2 を隔年刊行していくという形で、來年十二月刊行豫定の VOL. 15, Part 2 まで二二年間で二〇冊を編纂することになります。去年五月の一二五回理事會でこの編纂業務を VOL. 15 の Part 2 をもって辭退すると決めて、來年で編纂業務を終了いたします。英文の單行本については、略史の中にすべて載っておりますように今まで五冊出版しています。

交流關係では、まず國際東方學者會議、第一回は一九五六年、こゝしの五月の五一回會議まで、参加者總數は七六カ國一四三九四名。講演・研究發表の數は一八七四件となっております。

つぎに全國會員總會の第一回は先ほどの話にありましたように一九五一年（昭和二十六年）に開催されまして、昨年の第五回會議まで東京、京都で隔年に開催されておりますけれども、從來役員の方々を中心に二つの講演を行っていましたが、一九九一年の第四一回から東京の總會ではシンポジウムを二部會併設するという形をとりまして、現在まで

講演、あるいは研究發表の數は一七九件というようになっております。

また、國際東方學者會議あるいは總會に海外から招聘した著名學者の數は、一五カ國三名にのぼっております。近年 ICES におきまして、個人應募の研究發表からシンポジウムを中心に編成する方法に変わり、東方學會が一年間に五名は招くことが可能になりましたので、今後この招聘學者の數は急速にふえていくものと思います。

講演會、セミナーの開催件數ですけれども、創立當初は交通機關が今日のように發達していなかった事情によることと推察しますが、東京支部、京都支部とがそれぞれ獨自で主催し開催されていたようです。初期のころからの數を申し上げますと、東京支部主催で三九回、講演者數は四一名、京都支部主催での實施は一八回、講演者は二六名でした。また、東北中國學會、九州中國學會との共催の講演會では、三九回、三九名。それから五十年記念の大會や、近年の學術會議東方學研究連との共催シンポジウムなど四三件。日本研究、中國研究という形で開催していましたセミナーでは、日本研究は三一回、發表者三九名、中國研究は六回、發表者七名となっております。

ります。

最後に、平成十年（一九九八年）から始めました翻譯サービスですが、今年で九年目に入っておりますが、受託總件數は二九二件、仕上がり英文の枚數は二二九四枚にのぼり、國際交流に寄與出来ていると感じています。

戸川 この學會の事業内容について、事務局の方からご報告いただきました。

東洋學の理念の再構築

戸川 さて、このたびの座談會でございですが、座談會というのは、座長があつて、それについてのテーマが絞られていてやっていただくということなのですが、ほかでもなく「東洋學の理念の再構築」ということにまとめられます。この提題の持つ意味は、戦後のアカデミズム體制の變遷を反映しているものと思います。皆さんのご經歷によってもそれぞれ違うのではないかと思います。順位をつけず、お席の順にお話しただくのが自然ではないかと考えました。今期の理事會メンバーの方々は體大似たり寄つたりのお年でして、あまり世代に分かれてはいるわけではございません。

専攻の別になりますと、これはこの學會の

特色東洋學というもの、傳統的に歴史學といえは東洋史學の範圍でございします。別に中國學というのが漠然としていますが、支那哲、支那文と言っていた時分からのものが中心で、印度學、印哲、佛敎學というものが別に柱としてそれが一緒になって二大古典學を形づくっております。

ただ東洋學の中心になりますのは、やはり東洋史學と言われてきた學問の集團とその研究方法というのが中軸だろうと思ひます。山本達郎先生の整理された四つの時代區分によると四つに分けられておりまして、一つ目江戸時代からの漢學、傳統ある學問。二つ目には明治以後の西洋系學問、要するにシナ學にしろオリエント學にしろ、そういうふうなものとして構築してきた廣大な分野がある。三つ目には、今問題になるのですけれども、地域研究／地域學 (area studies/regional science) のようなものがある。そういうものがつぎと参入している、という。それは、分野が少し違つていけれども、専門研究の人們たちが自由に協力しているものと。四つ目は、この學會の成立したときからの國際交流という點が、外務省所管の學術團體としても大きい特色だと、山本先生はまとめておられ

るのです。

ところが、その一、二、三の分野についての大まかな分野が、東洋學という名稱すらなくなつてしまつて、その學部、學科や研究室の名稱もいまや變わりつつありますし、學問分野もどんどん細分化しております。一體東洋學はどうなるのか、まとまつた形でイメージがいただけているのか非常につかみにくい現状にあります。

それはどうしてかと申しますと、ここの學會はやはり學會連合ふうのものです。大體日本の學術は研究室單位でして、各基礎にある研究室から生い立つて、同窓會みたいなものから出發しているわけです。史學會にしろ哲學會にしろ。それが帝國大學がどんどん出来まして、同じような研究室の出店をつくつていったわけです。別の講座を作っていくのではなくて、講座制になったときから國史學ならその講座として、京都にもつくる、東北にもつくる、というふうになつてきた。そういうふうな、同窓會的な集會が全國的な學會に自然と膨れ上がった形をとっているわけです。けれどもこの東方學會はそうではなくて、戦後にあつて戦前の財産處理をもとにして、たまたますぐれた指導者の高い理念

のもとに、それらの學術團體を総合した形でつくられたという経緯がございます。人文系で世界に持ち出している研究としての国際、日本における東方（アジア）研究の場を提供してこられた。それをわたくしどもがまがりなりに受け継いでいこうとしているわけです。

ですから、この會員は推薦制になっていると同時に、自分の母體となっている學會を引きずってきているわけですね。そういうふうなものがこのメリットとしてあったというのは、はじめのころは學會誌を出すのも大變ですし、研究室から出すのも大變でした。ましてや國際交流として外國から學者を招く、またこちらから出かけるというのも大變でしたが、そういう役割を本學會が果たしていたということになるのです。現在では、今言いました國際交流といい、學會誌を出すというようなことは、もう簡単に出来るようになりました。

そこをここまでやってきて、現在の状況下で、一體わが學會が維持している存在理由といたったようなものは何かということ、考えさせられる時期になっている。私たち第二世代は、創設された初代のものをそのまま受け

継いできて、いいところどりしているという世代です。昭和一桁臺というのは、大體そんなものでございまして、それから後、私どもの後輩の方々は、さらにもっと廣がった状態なので、言いたい放題言うというふうな状況になっているのです。

それはしかしさっき申しましたように、みんなこのメンバーの方々は、それぞれ足のある研究室と自分たち學會の研究活動をやってこれたわけなので、こういうふうな東洋學研連に集まったような學會連合みたいなものがここで必要かどうかということ、それなら一體何をここで中心的にやれるのか、またやるべきか、ということが問われているのだらう、と思っております。

それにつきましてはどうか皆さま、お席の順におっしゃっていただければ、と思います。

村井章介先生からどうぞ。

村井 私は日本史學の専門なので少数派だとは思いますが、ただ日本史というものの中に日本があることは地理的には明瞭なだけけれども、學者たちの意識の中でそれが明瞭に位置づけられているのかというと、どうも

いわゆる「脱亞入歐」というものが依然として強いのではないかと。

そういう中で、東方學會というのは非常にアカデミックで「東方學」も學術的なレベルが高くて、そういう意味では非常にすぐれた活動をしてきているとは思いますが、それと、それが學生レベルにまでアピールするようなものになっていくべき点はあるような気がいたします。どうしたらいいかというのは、餘り迎合するようなことをやってもしょうがないとは思いますが、もう少し親しみやすい形のものにするにはできるのかなというふうに、私は思っております。

戸川 そこは創立以来、推薦制をとっているのですし、やはり指導される先生のご意向というものがつよく、反映してきておりますし、……。

村井 これは小さいことかもしれませんが、會議の参加費、學生値段というのをつくって、私はあれは大變よかったと思います。

戸川 ありがとうございます。いずれ皆さまからのご意見をいただきます。つぎに齋藤先生、どうぞ。

齋藤 東洋學の呼稱をめぐっては、學術會

そうでもないような気がしまして、アジアの中に何か浮かんでしまったような領域で、ですから東洋とかアジアとの關連の中で日本史を見ようということが必ずしも前提になっていないように感じる人が多いですね。私自身の専門はいわゆる對外關係ですので、いや應なく東洋史の分野との相互浸透というようなことが迫られるわけなのですが、そういう見方は必ずしも一般化していないということです。

それで、この學會へのかかわりというのも、私のそういう専門から、ちょっとしたきかけがあって参加させていただくようになったのですけれども、學會の中ではあまり熱心な活動をしてきたわけではありません。日本史關係の企画をして何か発信していきたいという場合に、なかなかしるべき位置がないような感じがして、實際に人もあまり集まらないというようなことを何回か経験してきました、ですからこれは後の方の日本學の位置づけということにどうしても私の場合なってしまうのですけれども……。

ちょっとそのことはおいておきまして、もう一つ話してみようかと思うのは、これは日本史ということではなくて、歴史學界あるい

議の東洋學研連でシンポジウムを開いた折とか、大型科研をどのようなタイトルで申請するかというように、近年でも「東洋學」で出するか、あるいは「アジア研究」の名稱を全面に出すかといった議論があったのを記憶しています。地域研究に重點を置いて發想するか、それとも傳統的ないわゆる「東洋學」のディシプリンに重きを置くかで見解が分かれていたようでした。

名稱の違いはさておき、東方學會は、戦後日本における東洋學の中核を擔ってきたという点、また、さきほどの理事長の話にありましたが、また、東洋學にかかわる多くの關連學會の接点ともなり、ある種、東洋學の同窓會的な役割をはたしてきたのも紛れもない事實だと思えます。

私自身はインド佛教思想史（とくに中觀思想史）を専門としていますので、院生時代から日本印度學佛教學會にもっと深くかかわってききました。この學會でも、たとえば近年チベットのポタラ宮殿において發見された維摩經のサンスクリット寫本に關するシンポジウムが設けられた折などは、狭い意味での専門をこえてインド佛教、中國佛教、日本佛教などの専門家が一堂に會して當該寫本の意義

は文學部の關係する學問領域全體を見て感じられる學生の志向なのですけれども、特に最近東洋關係のところに進みたいという學生の数が非常に減っているような気がします。幸か不幸か、日本史はそういう波をまだ受けていないような感じで、今のところ保っているのですけれども、先ほど申しましたように、日本史が東洋の中にちゃんと位置づけられていないから逆にそうなっているのかなという氣もするのです。

そういう状況の中で、東洋全體を対象とするような東方學會が何を働きかけていけばそういう状況が改善されるのだろうかということもいつも考えているところです。ある意味では短期的な問題もあるような氣がしまして、特に中國や韓國・北朝鮮との關係が非常に悪化している中で、中國や朝鮮半島に對するイメージが非常に悪いということが、學生數の落ち込みのかなり大きな原因をつくっているとは思いますが、しかしやはり自らの立つ位置が東洋の中にあるのだ、という意識が薄いということが、どうも全體的にそういう状況を生んでいるのではないかと。それに對して西洋史とか西洋學關係はそれほど落ち込んでいないという感じがしております。

や内容についてさまざまな議論を行う機会がありました。しかし、それでもやはりインド學佛教學の範圍で對應する事が多いのが實情です。

これに對して、東方學會のICESでは二度ほど、大乘佛教の起源と實態に関するシンポジウムを開く機会を得ましたが、いずれもインド美術史の専門家をパネリストに招いてからより廣い視野からの實りある議論が出来ました。これなども、東方學會がこれまで提供してきた貴重な役割の一端を示していると思います。このような東方學會のメリットは、今後とも誇りを持って繼續していったと願っています。

ただし、現代の學生がどれほど東洋學に興味をもつかという点については、我々も眞摯に問題を受け止める必要があると思います。アジアは近くなりましたし、アジアに残された貴重な文化遺産に接する機会も、幸いなことに以前に比べてふえました。しかしながら、そのことが、必ずしもアジアに残されたさまざまな古典の再評價や、その特殊にして普遍的な意味をもちうる文化的な諸傳統に目をむけることにつながっていないという現實があります。この背景には經濟・文化・情報

といったさまざまな面でのグローバル化（越境化、全球化）という流れのなかで、東洋なから東洋という地域的な限定がどれほど意味をもつかという問題が見え隠れしています。一方また、近年目覚ましい經濟發展を遂げる中國やインドにしても、大きな注目を集めるのは政治・外交・軍事関連のテーマのほか、急速な經濟發展とそれらに伴うさまざまな社會問題や深刻化する環境汚染等です。中國やインドが自らの傳統文化に目を向けるとして

も、近年では、その普遍的な價值を再評價するというよりは、むしろグローバル化時代ゆえに臺頭するナショナリズムや、イスラームやヒンドゥーの原理主義的な運動とも結びついた、きわめて政治色の強いものであることが少なくありません。

思えば、洋の東西を問わず、東洋學・アジア研究には、植民地支配という政治的な動機と國をあげての資金援助が支えとなって集中的に研究が進められたという側面がありました。戦後はまたインド、中國、ベトナム等における植民地解放運動とその成功が研究者に大きな希望と關心をもたらした時期もありました。くわえてまた日本における中國研究やインド（佛教）研究、さらにはまたシルクロ

ードへの關心などは日本の傳統文化のルーツを辿るという動機と無縁ではありませんでした。

これからの東洋學研究もまた、國內外の政治動向に翻弄されることは避けられないでしょうし、また、私たちがそうであったように、東洋やアジアに對する若者の意識もまた、時に應じて右に左に揺れ動くこともあるかと思っています。ただし、かつてと変わったのは、日本をふくむアジアの多くの國や人々は、文化的にはもちろんのこと、經濟的にも自信をつけつつあるということです。一部の政治家がいまだに抱いている歐米に對する屈折した意識やアジアを蔑視するような心性からは、今の若い世代は確實に解放されつつあるように思います。また、アジアの研究者との交流もかなり頻繁に行われる時代にもなりました。東方學會のICESもまたこのような方向で着実に貢獻していると認識しています。これからは觀光や經濟活動を通して民間レベルの交流はますます盛んになるでしょうし、何れの分野でも、國際的な研究交流と最新の研究に関する情報交換は日常的とも言える時代になりました。

かつてのような政治的・軍事的な動機から

解放された、純然たる——特殊にして、しかも普遍的な意味を持ちうる——東洋學・アジア研究を促進すること、私たちが直面する課題はこのあたりにあると理解しています。その意味でも、東方學會に期待される役割は大きいのだと思います。

先ほど触れましたが、私自身は、日本印度學佛教學會という學會に所屬しています。インドという地域の語學、文學、哲學、宗教を主に専門とする研究者と、インドから日本に至るまでの、およそ二四百年の歴史を経て形成されてきた佛教という宗教の教理や思想史、儀禮や教團などを研究対象とする研究者からなり、二六〇〇人ほどの會員を擁しています。學會の性格からして複合ディシプリン型（インド學）で、超域型（佛教學）という側面をもちますが、扱うテキストがサンスクリットであれ漢譯やチベット語譯であれ、文獻研究を基礎にするという点は共通項になっています。

また、インド學研究からスタートして佛教學をもカヴァーするようになった西洋における斯學の傳統とは異なっており、長い間の佛教の傳統と傳統的な佛教（宗學）研究・漢文研究を基礎として、明治以降は、ご多分にれず

西洋流のインド學研究の方法を積極的に導入し、佛教學の質的な向上を圖りました。とともに、佛教學の延長線上にインド學研究の重要性を見出して、梵語梵文學からさらには廣くインド學という獨立した分野をもたらし現在に至っているというのが経緯です。

したがって、母體となるインド學佛教學そのものが大なり小なり學際的な性格をもつとも言えるのですが、近年ではインド學關係者の多くが日本南アジア學會に加わり、インド佛教學を専門とする研究者はチベット學會にも参加するのが通例となっています。また中國佛教研究はもとより中國哲學（東洋哲學）や中國史研究との關係が深く、日本佛教を専門とする研究者は地域的なバランスを維持する上でも希少價值があるという面もあつてか、東方學會に對して中國佛教や日本學關係者に負けず劣らず貢獻してきたといえようかと思っています。何れにせよ、インド學佛教學の研究者には、東方學會を土俵にして隣接分野の研究者との交流をさらに進めていってほしい、と願っています。

戸川 今の印佛學會それ自體でも、それは現實しうるのではないですか、東洋學によらなくても。この東方學會の持っているメリッ

トは何なのでしょう。

齋藤 「東方學」の編集査讀に注がれる學識とエネルギーには刮目すべきものがありまし、その成果は掲載論文の質に反映していると思います。ただし、東方學會のメリットは何かといわれれば、やはり對象領域として東洋學・アジア研究という廣い土俵をもつことにあると答えられるのではないでしょう。インド學佛教學が地域的に越境する側面をもち、ディシプリンにおいて複合的な性格をもっているとしても、また會員の多くがそれぞれの隣接學會に参加している現状があるとしても、中國學を中心に東洋學の幅廣い地域と分野をカヴァーする基幹學會としての東方學會には、關連學會や研究會がさらに細分化される時代であるだけに、關連諸學會に接着劑を提供するとともに、東洋學を束ねる役割をも期待されているのだらうと思います。

戸川 東方學はそういう機能を保持しているからという意味で、やはり。

齋藤 そうですね。そういう意味では東方學會はその接点になるはずだし、さらに今後ともなっていくだろうと期待しています。

戸川 ありがとうございました。つぎにどうぞ、桑川光樹先生。

桑川 この座談會の、後の方の項目に「日本學の位置付け」というのがあります。私なりの考えは、主にそちらの方で話させていただきますので、その分、今は短く申し上げたいと考えます。

私の専門は日本文學の研究ですが、私にとって、アジアに開かれた窓、あるいは世界に開かれた窓——この窓は出口でもあり入り口でもあるわけですが——である組織となると、今のところ、この東方學會しかないと言ってもいいと思います。もちろん、國文學研究資料館とか、國際日本文化研究センターといった機關が、日本文學研究の「國際化」に取り組んでいますし、また例えば「中世文學會」「近世文學會」などの個々の學會も、おそらくそれぞれに國際交流を持つてはいるでしょうけれども、しかし、學會の場合は、いずれもまだ限定的であって、一般の研究者、例えば古代文學の専攻ではあるが同時に日本文學の全般に興味を持つ私のような者が、そこを據點に世界と交流できるというような具合にはなっていない。私が東方學會の存在を貴重なものに感じるのは、この點です。

ところで、東方學會の日本關連部門を更に充實しなければならない、ということは、先

日の理事會でも皆さんからそういうお聲が出ていましたし、私も同じ意見ですけれども、それには恐らく二つの大きな理由があるのだと思います。

一つは、いわば外からの期待です。東方學會というのは、もともとは、日本において中國學やインド學などに従事される方々の組織であって、そこに「日本研究」の分野を併せ持つという發想はなかったのではないでしょう。しかしこれを外側から見ると、「東方學」を標榜する學會の中に日本學が含まれないというのは、整合性に缺ける事であるし、またそれでは「日本研究」に關心を持つ外國の研究者にとって「東方學會」は據り所にならないという事でもあって、その整備が求められてきたのだと思います。

もう一つは、これは私は門外漢よくわかりませんが、中國學にしてもインド學にしても、日本における研究であるという性格から言えば、どこかで「日本學」との接點を持っている。今日の座談會の準備として、先日アンケートが配られましたが、其の回答の中に、「國籍を持った學問」の必要性を強調されたご意見があったのを、印象深く拜見した次第でした。その「國籍」と言うのは、私が

憶測すれば、もちろん政治的な區分としての國籍ではなくて、文化的傳統としての國籍という意味だろうと、解釋して理解しましたけれども。だとすると、極端に誇張して言えば、日本における東方學というのは、すべてこれ廣義の「日本學」である、という事になるかも知れない。まあ、それは半分冗談と言うか、比喩的な言い方に過ぎませんが、しかし研究の「國籍性」に積極的價值を認めるとすれば、各分野と「日本學」との關係は十分意識されていい事です。翻って日本學とは何か、という事も嚴密に問われなければならない譯です。

で、その「日本學」でありますが、それが一つの「學」である為には、當然、科學的な方法と自己完結的な體系とを備えなければならぬでしょうが、そういうものとして獨立すべきであるのかどうか、そこが大きな問題でありましょう。この點については、後ほど詳しく述べさせていただきます。

戸川 國文學の講座というのがどれほどあるのか、早稲田の一文が一番完備していないでしょうか。上古・中古・中世・近世と近代、それぞれに韻文と散文があり、十名ぐらいがスタッフで、それに國語學が何名か加わ

り、國語教育を含め十四、五名ほどがフルメンバーだと言われます。それがそれぞれ學會があつて、さらに特定主題を持つ學會があるのだと。全體としてまとめたのではないのかと伺いますと、そんな、名稱の團體はあるかもしれないが、別に意味がありません、ただ科研費とか何かを當てるときに、そういう大きい分野をこしらえて、そこに委員を出してや

っているのだということをおからさまに言われたことがあります。そこに、二十年ほど前に、和漢比較文學會という横斷的な學會が出てきました。漢文學會ではなく、日本思想史學會でもないですね。

ところで、日本學とは、全く名稱だけが堂々と言われるのですが、一體それがどういう内實を孕むものか日本思想を攻めている人は、さきの同窓會的な研究室の名稱から出てくるものとしては、まずは和辻(哲郎)さんの倫理學出身の人、東北大の日本思想史の人、それから日本史の出身、それに中國學會で漢詩文をやってきた人が兼ねているとか。それは佛教思想の研究でもそうなのでしょう。そういうふうな日本思想史學會という名前はあるけれども、いまさら日本學——思想と文化の傾向がまちまちなのだというふうな

もので、それにかぶせて日本學と總稱するのはどういふものなのでしょうか。

そもそも日本學という以上は、日本文化の史的成立を問うわけで、いまや大陸・半島・列島——日朝中の、漢字文化に代表される史的交渉の展開を、長大な、かつ俯瞰的な視野のもとに研究を進めているわけで、明治以來の、國語國文學・漢語漢文學から日朝中交渉史を基盤とする日本史學を、包括するものと考えられます。

ほんの一例として、今年、六十年ぶりに整理しました倉石ノート(本邦における支那學の發達)は、いまさらながら日本漢文學史研究が日本學のなかに占める位置を確かめさせたものでした。

いっぽう東洋學といったら、日本の代表的な學問、國際的な視野の中で論ずる先人たちは、常に私たちをそう勵ましました。中國學に代表される東洋學は、世界の先端を切る學術——いま謂う科研費COEの第一候補になる學問なのか。そこが、いまや問題になっているのではないのでしょうか。わが國の國際レベルに達した學術、日本學のなかの東洋學、それとも舊態の分析をつづける文獻史料研究をさすのか、このままでよろしいのでしょうか。

か。

ただ、質問しても、細分化されておるのですから、そんなこと聞かれてもわからないと言われるのが落ちなのです。それともそういうものをまとめていくという發想はないのでしょうか。對外的に言われるからやむを得ずここにまとめるという受身なものでしょうか。内實的に、そういう日本のものを文化史的に統一しようという考え方は出てこないのですか。

桑川 私は、外からの要求ではなくて内實的、内發的に、その方向に向かうべきだと思っております。ただ、例えば「國文學」を例に取りますと、文獻學が現在到達している高い水準を次世代に伝えていくだけでも大變な仕事で、それには顕微鏡で細部を覗くような丹念な作業、一種職人藝的な作業が必要ですし、脇目も振らずにそういう仕事に専念する學者がたくさんいてこれを支えるのではありません。國文學は潰れてしまふ。皆が皆巨視的立場に立って「國際化」する必要があるまいと考えています。

けれども、一方で、望遠鏡を手に廣く全體を見回している警備員風の人もなくしては困る。國文學の成果を、學際的、國際的に橋渡

しでけるような立場の研究者が育たなければならぬ。また、そうした人が、職人藝のあたりに、絶えず刺激を與えるのでなければならぬ。数は少なくないが、そういう部分を擔當する外向きの「國文學者」、私の言う「日本學者」の存在が、是非必要ではないかと思うのです。

戸川 それについて、細分化されている學會の人たちに向かって、支持されますか、そういう考え方。いや、細分化されてそういう職人藝でいいのだ、という考えの方が強いのですか。

桑川 いや特に反対はないと思いますね。誰でも頭では「廣い視野」の必要性は分かっていますから。ただ、廣くなれば浅くなる、という事への警戒心が當然働きますし、今更方向を變えるのは大變だという事情もあって、どうしても腰が引ける。だから、いざ自分がどっちに進むべきかという時に、國際的、學際的、巨視的立場を選ぶ人は、比較的稀なのです。

でも、そういう「外向き」の國文學者、日本學者を養成する機關を是非作らなければ、というのが私の持論です。

戸川 ありがとうございます。それこそ、

もう國文を何年か専攻したら、強制的に外國に行つてそういうものを教えて経験を積ませるとか。

桑川 今では、教員の海外研修も珍しいことではなくなりましたが例えば東大の國文科では、もう何十年も昔から、先生方が在任中に一定期間、海外の大學に滞留される慣例がありました。行先はドイツが多かったようですが。

勿論こうしたことも有益ですが、私が期待しているのは、教員ではなく、學生の段階からの「日本學者」の養成で、その具體的な案については、また、のちほど皆さんに聞いていただきたいと思います。

池田(溫) 京都に國際日本文化研究センターというのが二十數年前にできました。そういう點では日本においても日本學というものを、日本で研究しなければならぬ、という必要性を政府あるいは財界・官界等々で認識してそういう研究機關ができるようになったと思うのです。今後ますますこの東方學會は、日本における日本學に對して、さまざまな啓發的な努力を續けていくべきだということに感じます。

戸川 では濱下武志先生。先生には多方面

にわたつて活躍ですが。

濱下 東方學會は、みずからの獨自の領域とか獨自のディシプリンとは何か、という議論の範圍で活動するというよりも、むしろそれらとは少し離れたところから、研究相互を組み合わせていく役割というのでしょうか、あるいは異なるところを結びつけていくような、あるいはもう一歩積極的にむしろ専門化しているところ相互をつなげていくような機會、テーマ、討論の場をつくっていくことではないかと思っております。

池田先生・戸川先生がおっしゃったことで、東方學という「學」と東方學會という「學會」との関係ですが、東方學會のいわばディシプリンが東方學あるいは東洋學であるというつながりのお話であつたかと思ひます。

先ほど山本達郎先生の四つの課題についてのご指摘がございましたけれども、その四項目は確かに東洋學として大きく一つの傘の下にあるかもしれませんが、その相互は、またその一つ一つの中にもいろいろな緊張があつたように思ひます。つまり漢學と東洋史はまた異なつていたでしょうし、國際的な交流というときにも、戦後のアメリカのアジア政策

とアジア研究が受けた影響あるいは與えた影響というのでしょうか、そういう側面もあったと思いますし、それらの四つをもう一度現在捉え直してみると課題を感じております。

特に例えば「東洋」、もちろん「東方」というのは最初に戸川先生がおっしゃったように、中國ですと東方はオリエントの翻譯で、東洋という言葉はあまり使いませんが、現在のアジアとも重なると思うのです。「東洋」という言葉自体も中國から見ますと日本を指すという東洋であつたわけですから。さらにさかのぼりますと、廣州から南下する航路の「東洋・西洋」という形で考えられてきたという資料もございます。そういう東洋を今度は日本において西洋と對比するための東洋として、日本を東洋の中に入れたと思います。さらに、その東洋を例えば中國と距離を置くという形で西洋と東洋、東洋の中の日本というつながりを前面に出した文脈もあつたと思います。

このように見えますと、「東洋」という言葉自体が持っている歴史性や學術性、あるいは政治性や社會性という問題が出てまいります。これらの経緯からこれからの東方學・東洋學というのでしょうか、あるいは東方學

會の課題というものも導きだせるのではないかと思います。

そこで一つは東洋史という問題につながると思うのですけれども、漢學、支那學に對して東洋史學が出てきた背景は、因みに二〇〇六年は京都大學文學部創立百周年ですから、京都大學における、より廣いアジア視野というのでしょうか、例えば中央アジアですとか北東アジアなど、より廣いアジア視野を、中國を相對化するという意味も含めて東洋史というものが研究されてきたと思ひます。それは、那珂通世『那珂東洋史略』・桑原隲藏『中等東洋史』などを見ても、東洋史という學問分野はとても新しいというのでしょうか、とても意欲的な廣がりや方法で議論しようとする意圖を持っていたと思ひます。そのような時代の、もちろんその後、東洋史という範疇はいろいろな形で變化しましたけれども、二十世紀初頭の學問の變化や體系化という新しい展開があり、日清、日露戦争といふことも無関係ではなかつたように思ひます。そういう學問と政治と歴史と社會との複合としての東方・東洋とか東洋學、あるいは東方學研究とを、今もう一度史學的にも位置付けうるか、ということを考え直し

てみたいと思ひます。

この他に現在關心のあることは、最近の中國からの日本觀についてです。數年來ルース・ベネディクトの『菊と刀』の中國語譯が中國の大學生の中のベストセラーです。今七種類の異なる翻譯本が出ております。様々な議論があろうかと思うのですが、これまで日本は、中國の歴史あるいは中國知識人から見ればやはり中國文化との關連で議論されてきたと思ひます。現在それとは異なる文脈で、すなわちアメリカという他文化のしかもベネディクトによる異文化のモデルの枠組みで日本を見ようとしていることになりました。この現象は、ある意味では中國の脱亞と言うのでしょうか、中國の「脱亞入米」というのでしょうか。またこのような視野で作られる日本像は、もちろん『菊と刀』のみではなく、ラフカディオ・ハーン『日本文化論』、あるいは戴季陶の『日本論』などとともに讀まれている結果でもあります。現在の中國や韓國における、あるいはほかの地域における日本論、日本像、日本觀の歴史を、どのように研究テーマとして設定するか。もちろん、現在の中國で『菊と刀』を翻譯する世代の知識人のなかには、ほかに竹内好であれ、丸山眞男

であれ、あるいは津田左右吉であれ、南方熊楠であれ、内藤湖南であれ、翻譯研究しているのだけれども、そういう知識人の動きの中で、果たして日本の中國研究は、そういう動きにどう對應しているかということが、もう少し考えられてもいいのではないかと思っております。

戸川 いま、前世紀の始まりから百年間のことをおっしゃっていただいたので、大變よくわかるのですけれども、しかし濱下先生、それを今の學生たちとはどういうふうに接してられるのですか。どういう東洋學を築けというふうに指導しておられるのですか。

濱下 確かに、手遅れではないか、という感じはしておりますけれども。

戸川 日本と中國が軸になっているということ、確かに前世紀の初めにすでに學問として大きくまとめたしまったというのは、非常に大きいのだと思うのです。

京大文學部はちょうど百年前にできたのですが、その二年ほど前、明治三十六、七年です、か、一九〇四年に、一つしかなかったその東大文科大學で、それまで九學科あったのを哲・史・文三學科にまとめてしまった。だからその意義を言わないのですが、名稱が變わ

ってしまったことについて、そのとき學生自身がどういう意識を持っていたか知りたいのだけれども。

その中で二つ中心になりますのは、歴史科學としての史學科ですね。史學科の持っている方法論とそれをリードした力は非常に大きく、だから東洋史學がその中から突出してくるのはよくわかるのですけれども、哲學が一方でどうして筆頭學科になっていくのかというところが、私はちょっとそっちの方に疎いものでして、それは、はっきりした理由があったのだと思うのです。

哲學科の中に、もうすでに倫理學や宗教學というのができておりましたし、印度哲學も講座として獨立するのですけれども、その中でいわゆる東洋學的な物の考え方とか、和漢文・漢學を含めてどのように處置されたかというところによって、この百年間の東洋研究の一つ、アカデミックの本尊の一つの姿勢がわかると思います。

その中で一番成功したのは、さっき言いました國史、國文だと思っています。ナショナルスティックなアイデンティティを確立したという点では。もともと和漢文學科であったのが帝國大學になった當初から和文學科にな

って、それからリースの史學科からのプッシュで、和文學科から國史科を分出し、同時に國文學科に改制・改稱します。

ところが、その哲・史・文の中で、やはり中心になっていくのは史學科と國史科になりますし、片方の文學の方は言語科學的なものが中心になりますから、國語國文學というふうになって、日本の一番中心になるべき語文教育なのです。日本には語文教育という言葉はありませんけれども、語文教育として教育體系を學問と一緒にしてしまうのです、上田萬年が中心になりまして「國語」という考え方ができてくるわけです。

文學科の中では、外國文學の方は、その國の文學史と文學ジャンルを取り入れるだけですけれども、國語國文の方は日本語と日本文(國文)……やはり「日本學」ですね。その一番中心のところをアカデミックな中で確立するのは國語國文學とそれから史學科、それと並んで東洋史學が成立していくのです。

そこから外され、本来は日本學のなかに入っているはずの漢文・漢學というようなのがあいまいな形のままで、日清・日露の戦役の間に左右し支那學—シノロジーが京都の方で

別の姿をとって獨立してくるのですけれども。そういうふうなことを、いま濱下先生が最初に言われたのだろう、と私は思っています。

それで百年ずっと續いてきたのですけれども、現在、哲・史・文的な考え方が崩れていく、それとも存続するのか、と思いつづけているのですけれども。哲學は知の源泉であるという考え方がどのあたりで分解してしまうのか、そこが知りたいですね。今でも哲學科は筆頭學科だ、と言っていますけれども、私にはその意味があまりはつきりしない。東洋學にしても何にしても、背景にはそういう一つの知の源泉といったある價值體系によって與えられているといった信念?——になっている倫理や宗教や、哲學というのは、どうも私にはなじめないのですけれども。それが明治の近代に起きたのです。

私が大學に在職しておりましてときにただ一つやったこと、中國哲學には「哲學」という考え方はないのだといって、中國思想文化學科という名稱を主張して、定年で退職した後、それが實現しましたけれども。それがずっと根っこにありまして、そういうものとして近代學術の學問體系というものになってい

ることに不信をいだきつづけています。東洋學というものについては、かえってあまりまとまったイメージがないので、今濱下先生が言われたように、「東方」にしても「東洋」にしても、日本と中國の間で名稱自身も相對的に變わるのだというふうにありましたけれども、そういう点で、いまだにどうもすっきりしない次第です。

では續いて、美術史の立場から小川裕充先生どうぞ。

小川 今回アンケートに答える氣はなかったのです。理由はいま申し上げます。ただ、それなりに考えたことを申し上げるというところでお答えしました。

答えない、というのはどういう意味かといえますと、東洋學の理念の再構築とか、東方學會の將來像とかいう言い方をされても、答えようがありません。理事長がおっしゃいましたように、この學會というのは基本的に既存のディシプリンがあって、それに属している人が集まっているという、學會の中の學會みたいなものでして、それぞれのディシプリンで、私は美術史の方で抱えている問題というのはあります。

それぞれの方がそれぞれのディシプリンに

即してその問題について書かれておられると思うのです。その上、では東洋學の理念をどうするのかと言われまして、美術史で問題になっていることをただ擴大して、東洋學の理念でございまして、どうすべきかと語って見たところで、これは實効性がありません。美術史の方をどうするのか、ある意味です、で手いっぱいなところなのです。ですから、そういうことはお答えできないという意味で、アンケートにはお答えしないと思ったのです。ただ、それなりに考えるところがありましてお答えしたわけです。

極めて具體的なことです。今語ってみても別に答えが出るわけでもない問題について何時間も費やすというのは、はっきり言ってアホらしいと思いますので、やりたくないと思っております。

私が申しましたのは、まず、もともとが大學講師以上の方が集まる、要するにでき上がった研究者の會である。これは私自身學生のときにそういう印象を持っていましたし、實際そういうことです。その意味で言うと、先に実績報告などがありましたように、東方學會がこれまで果たしてきた役割というのは非常に大きかったし、實際に極めてすぐれた業

績が積み重ねられてきたわけですが、それは当面する問題について何の解決にもなりません。誇るべきことだろうと思うのですけれども、では、これまでではなく、これ以後どうするのかとなりますと問題点が少なからずあります。

その一つは、學生がはいれるようになったというもの、その数は極めて少ない。大雑把に調べてみたのですけれども、去年の名簿で會員總數一五五九、約千六百名。その中で學生會員がわずかに百十名、一割に満たないのです、七%です。私のおります美術史學會ですと、會員總數が二千四百名で、そのうち大學教員、美術館・博物館の學藝員、それから修士以上の學生、それらが全體三分の一ずつで、およそ八百名ほどになるわけですね。この極端な差異は一體どこにあるのか。東方學會で學生會員が研究發表を行う機會は全然ない、ほとんどない。それから「東方學」に掲載する機會は今たくさんあるというふうにおっしゃいましたけれども、美術史學會なんかと比べると極端に少ない。それは學會發表と合わせてですけども。この二點に盡きると思います。ですから、學會の基盤をもし強化するのでしたら、まず學生會員をふやすとい

うことをやらないといけないのではないか、改善しなければいけないのではないかと思えます。

もちろんここにおられる先生方は皆そうだと思ふのですけれども、じっくり業績を上げてゆけば、見ている人は見ていて評價してくれるのだ。そういう形でやっていったわけですから、けれども現在の學生はいろんなところに發表する、それから活字にする、ということをやらないといけません。就職の機會を得るのが非常に競争的になっているからです。

科研費の審査とか、それから學振の特別研究員の審査とかにかかわっておられる方もいらっしゃると思うのですけれども、必ず學會誌に發表している、それを最も優先にして評價せよ、とかそんなことが書いてありますので、今の學生にとっては、學會發表や論文掲載を重ねるということが非常に切實な問題であって、それに對して門戸を開かないと、この百十名というのは、ふえようがないというように私は思います。それをやっていかないうと、學生にとってそれぞれの屬している學會に對する歸屬意識というのはもちろんあると思うのですけれども、東方學會に對する意識というのはできないが、そうすると、

將來的に、では本當にこれまでどおりすぐれた學者の集まりとしての組織が維持できるのかどうか、これは非常に疑問に思えます。

二四

將來的にはそういうふうになるのではないかと危惧されるわけです。

これは餘談ですけども、アジアに對する興味がなくなっているというのは人文科學だけの問題かと思えます。とにかくこの大學でもそうでしょうけれども、僕らが學生のころは中國語クラスなんて、えっ、あるというぐらい、文科系全部で一つぐらいいかなかったです。今は大變な數で、第二外國語はフランス語と中國語はかなりのもので、ロシア語はもうなくなってドイツ語も少なくなってきた。そんな状態ですから、今の學生が、文科系だけに限っても、全然アジアに興味がないということはある得ないわけで、むしろビジネスチャンスでワッと雪崩れのように中國語に向かっています。

以前だと法學部と經濟學部で中國語をやるなんて學生はいませんでした。第一、發想自體がなかったですから。それが今はもうそういう人もいっぱいいるというふうな状態です。ので、必ずしもアジアに興味がないということはないと思うのです。やりようによっては

幾らでも興味ある人を探し出すことはできるであろうと思っています。

今のは何をなすべきかということで、じゃやれることが一つあるのではないですかという提案です。

それから、もう一つは、アンケートの三方の、東洋學の將來像、東洋學の展望ということについてですけども、やはり同じように形式的なことです。特に具體的に展望も提案もしたわけがありません。今言いましたように、東方學會は、既存のディシプリンのものが集まっている學會の中の學會である。とはいふものの、學生會員を除きますと、單一の學會である美術史學會は、實は東方學會と同じぐらいの數の會員を有しています。千六百名ほどですから、ちょうど同じぐらいなのです。

ということは、東方學會はアジア全體を覆っているというように自稱しているにもかかわらず、その範圍は實は非常に限られている。もともと日本のアジア關係の學問というのが中國とかインドとかを中心にやられていたわけですからいたし方ないわけです。ただ、中國とかインドとか言っても、人文科學が中心で、社會科學を含めた多分野の専門家

東洋學の現状とその課題

が参加されてはいない。

また、地域的には、例えば西アジアを中心としたイスラーム圏を研究している専門家がほとんどいないとかの問題がある。そういう専門家がいて、そういう研究をしている學生がいた東方學會に入ってきていけば、何かこれまでと違う状況に對應していける、時間がかかるかもしれませんが、と思うのです。ですから具體的にそういうように、まず足元からやれることをまず、やれる可能性があるならやった方がいいのではないかと、いうように考えています。

戸川 小川先生は、ご自身の研究室の學生を入れるというお考えなのですね。自分のところの研究室の學生から始める。そういうお考えなのですね。

小川 そうですね。要するに東方學會では學生が研究發表できるとなりますと、彼らにとっては實績になるわけですね。「東方學」に載ればもっと實績になりますし。そういう機會が今ないわけですよ、ほとんど。

戸川 東方學會ではそれが無いというのか。そういうチャンスを与えるような形をつくれと……。以前はICESで留學生を對象に研究發表を應募する形でやっていて、そこには

多くの若い人たちが集ってきていました。そういうふうな形に。

小川 留學生に限らず、普通の學生に發表などを行う機會を開くということです。

戸川 院生ですね。先生の屬しておられる美術史學會との關係はどうなのですか。両方とも活かしていけるというわけですか。

小川 結局ですね、もうそういうことをやらないといけませんので、從來は例えば指導教官が、あるものは發表の價值があるからやってもいいよというふうな感じで、ある程度取捨していたわけです。ところが、それがかなり大學でもうできない状況になっていきます。

戸川 どうしてですか。

小川 そんなことを言ったら、學生の方からすると、自分の發表機會が奪われるというふうなことになりますから、とにかくに學會の方に應募するように變わってきています。そうすると、これがまたなかなか大變です。例えば全文を読むわけにいきませんので、審査のためのレジュメを読んで判断するといつても、その程度だとよほどひどいもの以外落しようにないのです。いいの悪いのか。これを發表してみたいとかいうぐらい

ものとか、内容がないような要旨までありますから。そうすると、結局應募数は極端にふえています。ふえていますし、ありていに言って、水準は相當下がってきているわけです。學會發表の方も機關誌のようなものも、ほとんど學生の投稿論文がすべてみたいなことになってしまっていて、それはそれで問題があります。はっきり言って問題はあるのですけれども、ただそれに對應しないと、學會としては後継者を育てていく組織としての意味がなくなると思うのです。

ですから、そういう意味から言うと、東方學會が假に門戸を開けば、中國とかインドとかだけでなく、イスラームの方で、なかなか機會を得られない學生も發表できることになりますから、それはそれで非常に大きなチャンスになると思います。學生にとっては非常にメリットがあると思います。學生にとってメリットがあるということは、それを教えているイスラームならイスラームの先生にとってもメリットがあるということになりますので、これは一番具體的に可能性としてはできることじゃないかなと思って、アンケートに答えたわけです。

戸川 小川先生は、毎年ずっとICESで

小川 いやいや、そんなことはないですけども、學生には困難です。

戸川 特に「東方學」がステータスが高いというのは、どういうことなのでしょう。

小川 それは學會誌であること、それから歴史があるからです。學生のときに驚いたのは、『日本の中國學者』という本が出たのです。それを見たら、それぞれの方の所屬學會はほとんど出てないのに、東方學會會員という肩書きはきちんと出していたということです。

戸川 さて、では、桜井由躬雄先生どうぞ。

桜井 私、東方學會には本當に新参者です。二〇〇一年に山本達郎先生が亡くなられて、今のところ、先生の御靈に縛られてこの東方學會に参加している、というのが正直なところです。私自身も自分は東洋學者だと思っただことは一度もございません、自分は地域學者と考えております。東方學會の中では地域學者を自稱するのは非常に少数派ではないかと思えます。東南アジア學會、東南アジア學會は今六百名いますが、恐らく私以外に誰が東方學會に参加しているかという事を考えますと、やはり日本のアジア研究全域の中で

東洋美術史研究部會を組織してやってくださっていますから、美術史の關係の人は、そういうところにみな定期的に集まるようになっていくわけですね。

小川 集まりますね。ただ、これも餘談ですけれども、せっかくいい發表を選んでも、「東方學」誌は判型が小さいので、美術史にとってはあそこで發表するというのはあまり意味がない。だから、ちょっと遠慮いたしますとかが言って、別のところに投稿されてしまうということもあるのです。機關誌の判型の問題はまた別の話ですから、今はこれだけにしておきます。

池田(溫) 美術史學會では、定期刊行物としては「美術史」を出しておられる。あれは年に何冊ですか。

小川 はい。年に二冊です。そのほかに、いま私が編集委員をしている「國華」があります。それにそれぞれの大學の紀要です。紀要がたくさんありますから、それに載せる。ただし、やはり學會誌が一番ステータスが高いので、「國華」なんかに載せても、文科省から言いますと、その他に屬するのですね。

池田(溫) 「美術研究」がトップ、「國華」

東方學會というのは非常に特殊な學會なのだ、という感じがいたします。

私は現在、東京大學東洋史研究室の主任教官でありまして、二〇〇七年春には定年になります。その最後の年に大變な事が起こりまして、まずその紹介からさせていただきます。駒場(教養學部)から(文學部)東洋史に進學する學生数が激減しております。それはもう並大抵の激減の仕方ではございません。今はまだ學内情報の段階です。具体的な數字を申し上げる事はできませんが、今から十年前の六分の一以下という状況だという事があります。去年の半分です。要するに數名だということです。それも非常にすくない方の數字だという事です。大變な状況に入っているのです。大變な状況になりすけれども、例年、進學生の少ない印哲、印文、中文、中哲に比べて、東洋史はいっぱい學生が来るという事を、私も長い事信じていたのですけれども、東洋史も、現在はほぼ同レベルになりつつあります。法人化以降、學生が来ない研究室というのは、現状のままでの維持、發展は難しいと思います。私の後任、つまり東大における唯一の東南アジア史のポストですが、私の後任がすぐ任命されるという

と雙璧と言えましょう。

小川 「國華」は世界でいま一番歴史が長いはずなのですが、二番目ですかね。近年、文部省から單なる美術雑誌ではなく、學術研究誌として認められましたが、それでも學會誌よりはランク下の扱いです。昔は「美術史」なんていうのは頼んで原稿を書いてもらわないとだれも書いてくれなかったのですけれども、いまや各冊とも單行本みたいに厚くなってきています。

學生にとっては先に述べたような切實な問題があるということなのです。水準の低下ということをどうするのか。美術史ではそれがある程度許容できるとしても、「東方學」で水準が低下するというのはかなり問題になります。ですから、例えば別にもう一つ發行するとか。そうすると忙しくなるのですけれども。

戸川 私が勝手に想像しておったのですけれども、全国的に美術館がたくさんでき上がった時期がございました。學藝員の人たちは各圖書館や美術館でそれぞれ紀要を出していますから、そういうふうなところへ發表するという機會はおおくなってきているのではないですか。

事態ではないようです。

さらにはかつてのように、大學院を修了して研究職に進むということは、もうすごい困難の中にあるといっていると思います。歴史だけに限りませんが、東京大學のアジア研究の大學院は非常に多くの他大學出身者によって構成されています。東大の中から進むというのがいいか悪いかは別問題として、東大の學部からアジア關係の大學院に進學するということが、かつてはそれが普通のルートであったものが、今はもう少なくなっているのです。これは研究職への道に一般的魅力がなくなったことだと思います。東方學がどうのこのの地域研究がどうのこのの、という以前に、日本の東方學を含めたアジア研究そのものがなくなってしまうということ、非常な恐怖感を持っております。

確かに私自身の十年前の感想、あるいは天安門事件ぐらいからの感想を見ても、私も自分の心の中には反中的になってきたという氣はすごくするのです。中國嫌いの青年が増えている事は非常に多いだろうと思います。

それから、この間の動きでイスラームを恐れる、というか怖がるというか、そういう傾向

の學生諸君が多いことも、また事實でありま
す。いづれにせよ、私たちが長い間研究して
いた對象に對して、學生が恐怖感とか嫌惡感
を示しているという狀況があるのは、私は事
實だと思ひます。

だからといって、若い人のアジアへの關心
がなくなつた、ということとは全く違ふと思
つています。アジアを知りたいとかアジア情
報をとりたいたいという形で學生認識は、むし
ろ擴大していることも事實だと思ひます。中
國語學科は衰退しても、教養レベルの中國語
の人氣はすごいです、どこでも。それが結局
研究職にも専門職にも進まないという段階で
終つています。これはアジアの情報、アジア
の理解に對する現在の社會的な需要に對し
て、これまでの日本のアジア研究、なかな
く東方學が答えていない、ということに大き
な問題があると思ひます。

では何が今までの東方學と、現在學生が求
めているものと違ふのだ、ということです。
私たちがアジア研究をしていた事と、狀況
が、環境が、全く違ふ。情報入手環境が、全
く違ふと言つていいのではないでしょう。か
少なくとも、今インターネットを見ていれ
ば、大學に行く必要はないのではないかと

いますね。情報ということだけならば、何で
も知りたい事はほこぼこ出てきます。です
からアジアの無料の提供情報だけ見てしま
して、その邊の書物よりもインターネットを見
ていると、大學の授業よりはよほど最新の
ものが得られる、という情報入手手段が全
く違ふ、という事が一つです。

それから、私たちは先生にこの本が良いと
いつて習つて、初めて其の本を買うのだけ
でも、今は先生いらないですからね、知り
たい索引項目をインターネットの新刊情報や
圖書館情報でひけば、大量の關係書籍の書
名を知ることが出来ます。アジア情報は、わ
ざわ學ぶものではない、という認識が一つ
でしょう、あるいは大學で學んでも知れた
ものだ、という認識でしょう。

第二の問題は、やはり現地に直接行ける時
代になつたということだろう、と思うので
す。つまりアジアが秘境でなくなつた、ある
いは文獻を媒介にして勉強する場ではなくな
つたということだろう、と思ひます。現在大
量の人間がアジア地域にいるわけで、長期在
留者だけで二六萬人、短期の旅行者なら一
千萬を超える人々がアジアに住み、アジアを
歩いているわけです。これらの人々が日本の東

方學やアジア研究から情報を収集しているこ
とはまずない。ほとんどが、何も知らずに現
地に入り、現地情報という形で情報を収集し
ているのです。つまり、アジアへの關心、ア
ジアとの關係というものは極めて強いにもか
かわらず、この需要に現在の東方學ないしア
ジア研究は應えていないのです。

それらが結局、今言つたような東京大學に
おけるアジア研究のかんりの減退、東洋史の
減退だけなのかもしれないですけど、でも、
そのように思ひます。

この狀況は、別に日本だけではないような
氣がします。私、二〇〇二年にオランダのラ
イデン大學の國際アジア研究所 IIAS とい
うところに留學しておりましたが、矢張り同
じような狀況は發生しているわけで、いわ
ゆる東方學關係の大學というのは、學生にも困
るし、もう殆ど講座もほとんどつぶされてい
くというのが、ヨーロッパでは實情だと思
ひます。それ以前にアメリカで、既に起こつ
ていました。

私が所屬したのはエイジアン・スタディー
の方の研究所だったので、この研究所は
ライデン大學に長い傳統のあるオリエン
タルとの研究と、全く關係がありません。私

の知る限り日本では地域學、アジア研究なの
か東方學か、なんてこゝ二、三年議論してお
りますけれども、ヨーロッパの國々ではこう
いう議論は先ずないと思ひます。

日本は大變いい國だなと思ひますし、
そのよきに東方學會の存在が貢獻しているの
も事實です。しかし、日本でも東方學會をの
ぞけば、實はほとんど議論しない、全く違
う學問であると認識しているのが大部分だろ
う、と私は思つております。

たとえば地域研究關係諸學會が、東方學を
視野に入れていかといへば、全くありませ
ん。學生の意識も全く同じです。では地域研
究が、アジア情報への需要に應えているかとい
へば、そんな事はなくて、狀況は同じで
す。つまり學生にとっての魅力は失いつつあ
る學問であると思ひます。つまり共倒れなの
です。

先程から明治の國文漢文とシノロジーとい
う事が問題になっていますが、あれと同じよ
うな事がもう一回出ていたのではないかと
いう氣がするのです。我々がやつていた東方
學というのは、一つの傳統は、まさに明治以
來からの、漢文を讀んでの實證主義で、ご
ちやと、言つては失禮ですけども、非

常に職人藝的に美しく仕上げる。こういう傳
統を確かに私たちは持つていたことが一つで
すね。其の傳統と、もう一つアメリカ直輸入
といつていいのでしょうか、エリア・スタ
ディズの流れが今、對立しあつてしまつてい
ます。

これは日本が明治に國文漢文とシノロ
ー、あの當時シノロジーといひますか東洋史
學といひますのは先程お話があつたように非常
にファッショナブルだったものですが、
同じような對立狀況を引き起こし、結局兩方
とも現實のアジアの理解にはそれほど貢獻で
きずに、滿洲事變から日中戦争まで突っ走
ちやつたわけです。何か現在の段階は同じ様
なことの繰返しではないか、という氣がす
るのです。

今こそ、社會の需要にも適應し、しかもサ
イエンスであるという學問、東方學でもなく
地域研究でもなく、しかし、世界的に優れた
傳統を持つ東方學と地域研究の地盤を繼承し
た學問を、私たちが今つくらなければならな
いという氣がいたします。

それは何だろうということ、日本學に話
を持つていきたいのですが、日本學というの
は、私はやはり日本人のやる學問じゃないと

思ふのです。これは例えばアメリカに
Institute for USA Studies があると聞いたこ
とはないのです。イギリスのイギリス學研究
所とか、フランスのフランス研究所って恐ら
くないだろうと思ひますね。「國際日本文化
研究センター」は極めて珍しい存在で、似た
ようなのがベトナムにあります。

どうして日本でああいうことを考へちゃ
つたのかよくわからないのですが、そこは一つ
ヒントがあつて、あれは國際日本文化研究セ
ンターであつて、日本日本學研究センターで
はないということです。日本學というのは、
先ほどの國籍の議論で言へば、日本語ではな
くて、やはり國際語だと思ふのです。世界
が日本をどう理解すべきかという目的のため
に存在すると思ふのです。インターナシ
ョナルなレベルでしか存在しない學問というの
は當然あるべきです。それが恐らく日本學であ
つて、だから日本學専門の人が日本にいるわ
けがない、と思ふのです。

日本學的觀點というのはなんだろうとい
うこと、それは日本というものをアジアから相
對化するということだと私は思ひます。つま
りアジアの中の一國としての日本。さつき村
井先生がそういう認識がないのだということ

を言われて、非常にがっかり來たのですけれども、やはりそれをもたなければ具合が悪い、日本學にはならないし、國語でなく日本語にもならないだろう、という氣が私はするのです。日本、ニホンと、國內でいる人はあまり學界で信用されない、と思うのですが、日本というのは、アジアの中で語られれば、日本という言葉の學問的な意味があると思うのです。

日本の東洋學・アジア研究というものを、この「日本學」のアナロジーで考えたいのです。日本の東洋學・アジア研究は、アジアの研究対象地域を外からの目で相對的に理解していく、という事にあるインターナショナルなレベルの學問、だと思ふのです。

では、それはヨーロッパが語りかけたものの、つまり傳統的なオリエンタル・スタディーズと同じではないという議論がある、と思います。私は決してそうではないと思います。先ほど國籍を持った學問って、いい言葉だなと思うのですが、何か日の丸が後ろで振られているみたいで、言葉として抵抗があるのでむしろ、郷土を持った學問、と言った方がいいでしょう。

アメリカ人がどんなにアジア通のアメリカ

人でも、アメリカ人の書いたアジアはちょっとおかしい、と。先ほど「菊と刀」という議論が出ましたが、あれはあまり讀まれてはまずい、というニュアンスでお話になったのではないかなという氣がするのですが、たしかに、あの本は私たちが讀めば日本ではない、という感じが非常に受けますね。極端に言えば、ラストサムライとかサユリとか、の映画をみて、感じる違和感と同じものです。

日本人だからアジアが分かる、とは申しませんが、日本人だからわかることもある、ということとは依然として事實であって、そのアジアとの共通の心性とか感性が日本人のアジア研究の最大の特色であり、恐らくそれは最も訴えなければいけないことだろう、というぐあいには私は思います。

例えばちょっと傲慢になりますが、私はベトナムの紅河デルタの農民の社會・文化・歴史さらに農業のありかたについては、たとえばソ連アメリカに留學して研鑽を積んだベトナム人の學者さんよりも、はるかに正確に理解しているからだ、と思います。具體的には、共同體性といういまや市場經濟主義者に最も嫌われている觀點ですが、このような視點は、これまでの日本の東洋學の業績の中に

いくらでもあると思うのです。そして、その日本人の心性とアジアの心性との共鳴點の究明ということにこそ、傳統ある東方學はもっとも力を發揮すると思います。

たとえば、日本の儒教研究はクリスチャンが儒教を他者として分析しているのではなく、日本の儒教的教養人が、中國の儒教を内なるものの相對化という視點で分析することのできるのです。

いうまでもなく、サイードのオリエンタリズム批判は、歐米の東洋學への批判ですが、これを日本の東洋學批判に重ねていく一部の地域研究者の議論には、無理があると思います。

こう考えてみると、地域研究、いまその具體的な批判は控えますが、日本の地域研究としてのアジア研究は、東洋學をベースにしてこそ、その世界的な意味を主張できる、と思います。私は東洋學が地域研究にいたらずらな反感を感じることなく、また、地域研究と東洋學とが互いに無視することなく、合作することが可能であり、またしなければならなと思っています。

これからの東洋學のあり方というので、しかもこれからの社會需要に乗っていくという

ことは、やはりわれわれのアジアの理解というものを積極的にアウトプットしていく。それで、いわゆる一知半解に若い人たちがだまされない、そういう機能を私たちの東洋學は持つていくべきだと思います。以上です。

戸川 そこで、もっと現實的なことを申します。そういうことは、やはり大學の學科の中で構成すべきだ、ということです。その人材育成の方法が重要ですね。

桜井 正直言って、大學の學科でこういうものをやるというのは、よほど今の文科省が變わらない限り、今の政權が變わらない限り、あるいは日本がかつてのような、ものすごい好景氣に入って、ふたたび文化に目を向ける餘裕が出来るのか、そういうことのない限り、東方學系統の學科がふえるということにはほとんど期待し得ないですね。問題は東方學系の學科の増設強化ではなくて、アジア研究の學科のなかに浸透していくことだと思ふのです。國際學部だとか地域學部とか、アジア研究關係學科はまだ増設強化の可能性がありません。その中に、我々が持ってきたような東洋學的なあり方、どういうことかという人間文化的なあり方ですね、これを導入していくこと。

つまり今なされているのは、はっきり言ってアメリカ流の國際關係論とか、計量數學的な經濟史とか、そういうところのアジア理解が、いかにつまらないか、を知らせていくことだと思っています。つまらないですよ、正直言って。それに我々は、人材を派遣できるようにしなければいけないと思います。

一番の問題は、研究者教育です。教育を制度的に考えるのではなく、東方學の意義を發信できる教育をつくることだ、と思います。現代のアジア研究がいかに間違っているか、いかにつまらないか、ということ告發している人材、いわゆる歐米風のアジア研究の中に伍していける人材を育てることだろうと、私は思っています。

戸川 ありがとうございます。

では、次に平田昌司先生に發言していただきます。それでは、よろしく。

平田 私は中國語學でありまして、いわゆる東洋學の中ではなくともと一番端っこところにくっついております。のみならず、現在の研究動向の動きも、東洋學と中國語學とは距離が離れていく傾向が強くなっていると思います。恐らく、會員の動向については、事務局の方でも把握しておられて、よくお分か

りのことでしょう。そういう流れの中にいる立場から見たことに限定し、いくつか感想を申してみます。

先ほど桜井先生がおっしゃいましたこと、アジアに對する關心が薄れているということに決まてないという點、それはそのとおりだと思います。初級中國語の教師として學生を見ていると、いま現實の中國とかインドとかチベットとか東南アジアに行っている人數は相當に多いと感じられます。われわれが學生だったころとは全然違うのです。大學に入って、その年にチベットに行ってみるのが、そんなに驚くようなことではなくなっている。

すると、たとえば文獻を主たる對象とする學問分野としての、東洋學に近い中國語學は、現實の中國やアジアとお客さんを取り合えないといけません。本をかなり讀んで、時間をかけて、言葉の研究がだんだんできるようになる、それには何年かかかります。一方、行って觀察してみれば、生きたことばの面白さが容易に感じ取れるわけです。現實の中國そのものの持つ魅力を相手に、文獻を使った研究に來なさいという引っ張り合いは、力關係としてなかなか難しい。中國ばかりで

なく、インドにて好きになったという學生もいますし、チベットに行つてよかったという學生もいますし、東南アジアもそうです。もちろん嫌いになる場合もあります。どうやら、東洋學を取り巻く環境の變化の一つは、先ほどのお話にも出ましたけれど、かつては本で讀むことしかできなかった世界に、現實に入られてしまふことです。現場で實際に見た印象と、文獻中心に教えている事との間の齟齬に見える部分を、うまくこちらが處理できないでいる部分があるかもしれません。さらに、學校を卒業して社會に出て就職し、アジア各地に派遣され、現地で何年も生活したという方もずいぶん増えていきます。その中からもたらされてくる情報は、一種の「實感」の裏づけがあるわけで輕視できません。

傳統的な研究方法は、こうした現場の「實感」を説得できないのか、差し出すべき何ものも持たないか、というと、そうではないでしょう。中國の事例ばかりになりますが、向こうの古本屋でも日本語の本が割合に目に付くようになりました。どうも日本人留學生がおいでいったと判斷されるものもあります。中國の現場に身を置いて、中國の歴史や傳統

を論ずる日本語の本を讀んでいたわけなのですが、中にどうかと思われる質のものが、かなり多くまじっています。中國を知りたい欲求があり、わざわざ日本語の本を讀む、しかもう少し良質なものであるのにと感じられる、そのギャップが氣になります。今後、そこを埋められるものが出てくればと期待します。ひょっとすると、その古本屋にあった良質な日本語の本はみんな賣れてしまい、顧みない人がいない本ばかり残っていただけなのかも知れませんが。

ここまで申しましたのは、内の「實感」に對しての感想でした。今度は外に對してです。

最初に、一つ印象に残ったできごとをご紹介します。今年、臺灣でいわれる「漢學」關係の會議に出ましたとき、最終日に總合討論がありました。現在、臺灣でも「國學」・「漢學」系の學問の没落は、關係研究者の間でかなり危機意識をもつてとらえられているようです。その危機感を語る中で、「漢學」のあり方が話題になったとき、日本の「漢學」も粗上に上がりました。そのとき、一人の報告者が——臺灣の學界全體の傾向を決して代表しないのだそうですけれど

も——日本「漢學」に對するあからさまな不満を語られました。日本の「漢學」研究者は、中國にアイデンティティを持たない、とおっしゃるのです。日本の大學で研究上の議論を聞いていると、孔子の思想のここに缺點があるとか、孟子の思想がどうこうとか平氣で論じるのは心情的に許せないとおっしゃるのです。これは臺灣の學界でもかなり極端な反應であるとは思いますが、ある意味で日本の中國研究の有している意義も示唆している發言だとも思います。現實と距離感を保っているのが、日本の東洋學にとって、一面メリットでもあるという點、強調しておくべきでしょう。

この距離を今後どう取るべきかは、次第に大きな問題になってくると豫想されます。今中國が經濟的に伸びつつあります。恐らく十年を出ずして、中國をこう見て欲しいという理想型での中國學が、中國の人たちによって作られ、世界に輸出されるでしょう。それ以前でも、今は留學がごく普通になり、中國語圏で研究の訓練を受ける機會も多いわけですから。交流の機會が増えた結果、中國のナショナリズムに足を置いた先生のもとで指導を受ける機會、そうでない先生のもとで學ぶ機

會、いろいろです。學ぶ側の反應は、同化或は反撥といういろいろですが、距離感が薄れる結果、異なる研究の傳統がそれぞれ持ち合わせていた特色を稀薄にする可能性も否定できません。先ほど、「郷土」とか、國籍という話題が出てきました。けれども、國籍が日本だから日本型の研究をしているとは限らなくなりつつありますし、國籍は中國だが研究手法は「日本」的だということもありえます。少なくとも中國語學に關しては、境界のところで相當入り混じつてきている事を明確に意識せねばならない、その状況下でどう仕事するか考え續けていかなければならない、という印象を持っております。とりとめの無い話になりましたが、以上です。

戸川 平田先生が東洋學と中國語學と關係ないというふうに言ってしまったけれど、平田先生の世代には東洋學なんているのはあまり必要じゃないんですね。

池田(溫) 漢語學の研究でも、例えばタイ語との關係とかあるいはチベット・ビルマ系の言葉との比較とか、あるいは太平洋諸島の言語との對照とか、そういう分野の研究、關心というのは決して衰えていないのではないかと思います。有力大學から、研究者が

平田 ちょっとつけ加えます。私は別に東洋學と中國語學は離れてしまふのがいい、と言っている譯ではありません。ただ、現實に中國語學の大勢は傳統的東洋學とは離れる方向に動いていると感じています。

池田(溫) 私も北京の日本學センターに一年半、九二から九三年まで派遣されて、中國の人の日本研究への關心に接しました。日本學研究センターができたからというわけではありませんけれども、だんだん關心が廣がって深まっている側面があることは否定できないと思います。もちろん日本にも留學し、また日本で定職を得て漢學研究している人も少なくない状況です。「東方學」の投稿論文の中でも、東アジアからの留學生の寄稿のパーセンテージがだんだん高まっているのではないかと、そんな感じがしています。ですから、學會として、殊に留學生がたくさん來ている韓國とか中國、臺灣の人にとっては、東方學會に對する關心は決して低下してはいない。

平田 中國語研究に限って申しますと、この十數年の間に、アメリカ合衆國中中國語の歴史的研究の勢力は大きく衰退したのではないかと思います。有力大學から、研究者が

とんどいなくなつてしまいました。

池田(溫) ただ、アメリカで漢語を教えている人はかなりいますよね。中國人あるいは中國系の……。

平田 現代語の研究者はたくさんいるのですが、歴史的研究を専門とする人はずっと減りました。

池田(溫) 現代漢語の言語學的な研究に重點がシフトしている。そういう傾向は確かにあると思います。

戸川 では、狹間直樹先生、お願いしします。

狹間 多くの方から興味深い意見が出されていますので、いろいろ觸發され、あれこれ考えるのですが、少し抽象的な話からしたいと思います。といいますのは、東洋學、東方學、アジア學、いろんな言葉が出ていますけれども、この學會自体は東方學會が「東方學」を出し、その「ACTA ASIATICA」アジアに關するものを出している。しかも今日の議題は東洋學をどうするか、であるということ、この三つの關係というのは皆さんの中ではみな、それぞれに整理されているのですけれども、受けとめるときにはそれぞれずれが出てくるのではないかと思います。

いま話を聞いていましたら、とりわけ桜井先生の話でそういう感じが強かったのですが、このアジア学というかアジア研究、それは地域研究にぐっと偏った話として、それはまた完全にイコールにするとうと違ふところもあるのではないかと思うのですけれども、その場合のアジア学というのは現状分析的なアジア学、アジア研究というふうには私は受け止めました。それに對して東洋學及びそれとは異なるものとしての東方學というのは、傳統的な文獻學を主にしたものであるということと、その二つの範疇をまず分けておいて考えたいと思います。

京都大學文學部創立百年ということで戸川先生からいろいろ出ましたけれども、實際として百年で、東洋史ができて來年で百年ということとです。東洋史に入ったころには、東洋史とは、といったようなことを考えたこともなかったのですが、東洋史イコールほぼ中國とその周邊地域の歴史ぐらいの感覚で入っております。しかし今から考えたら、そもそも明治以後の學問の成立そのものからして、戸川先生が言われたように、哲學・史學・文學という言葉の成立一つとってみても、我々は新たに生れた學問を踏まえてしか、それに參

入できなかった。江戸時代の蘭學の時代はさっておき、明らかに現在の學問は洋學の上に成り立つもの、漢學を基礎にもつ洋學者がつくったものですね。哲學はもととなかったのですが、いわば西洋の學問を全體的に吸収する窓口というようなものとして、それをつくった。史學は「史」(經史子集の史)というのがあって、ヒストリーに近いから、その「史」に學をつけて史學。「文學」に至っては、全く意味内容を變えてしまった。そういう形で「史學」・「文學」が生まれて、しかもそれが「哲學」と一緒に文藝部をつくった。この文學部の「文學」は、恐らくもとの立派な言葉としての「學問」を含蓄させたものだったでしょうから、哲・史・文の文學と文學部の文學はまた違うのですが、しかしそれは置いておいて、哲・史・文の三學科ができて、その史學科の中の東洋史學專攻というものを選んでいたのでした。

濱下先生がおっしゃいましたけれども、中國では「東洋」は日本のことだからということとで、笑話的なことをちよつと言いますと、戦前に京都大學へ來た吳廷璽という留學生がいるのですが、その人は「東洋史」に入

りで「東洋史」へ入ったのです。そうしたら中國のことをやっている、と驚いたわけですが、吳先生は文革以後、日本史學會ができたその會長になって收まったのですが、それは餘談です。

ですからそういうことで、「東洋」云々という言葉も、中國と日本と違ふけれども、日本で東洋という歴史的範疇としての言葉がいつからできたかといったら、桑原隲藏『中等東洋史』(一八九八年)が出て東洋史という語が流布する以前にはそれほど明確にあらわとは思えない。だから明らかに、これは西洋史に對する東洋史、西洋に對する東洋でしかあり得ないと思うのですが、そうしたら、そのときに西洋というものが我々にとって歴史的であつたのは、結局もう誤解を恐れずに言えば、いわゆる科學、サイエンスというものの體系を一應つくり上げる中へ、我々の人文科學(この言葉の成立は大分おそいのですが)的なものを一つの體系の中へ入れてしまつた。歴史もその一部になつたという形で出てきたと思うのですが、その場合に、日本における東洋史學の出發は、結局、漢學を基礎にした中華文明に對する把握というものを西洋歴史科學というものを結びつける形、それ

はシノロジと把握されたわけですからけれども、それがつくられることによって京都大學の東洋史學などがシノロジの中核になつていったというふうには私は理解しています。

しかし、シノロジが中國中心の學であつたことは間違いない、と思うのです、少なくとも京大東洋史では。そこで、東洋史を名乗りながら中國中心の東アジア史にとどまっている狀況を超えてアジア史の立場を確立せねばならない、それを提唱してこられた宮崎市定先生が創られたのが西南アジア史學で、東アジアに對して西・南アジアまでつけ加えたわけですね。先生はもとと世界史の構成部分としてのアジア史、中國史を含みこんでアジア史でなければならぬという立場ですから、『アジア史概説』という示唆的な著作をちゃんと書かれ、西アジア、南アジア(西南アジア)史コースというものができ上がった。そしてそれから三十餘年、今では關係者が學問的な基礎を相當築かれたと思います。

それは非常に簡単な言い方をすると、ある老先生は、あの見分ける事も難しいアラビア文字を西南アジア史の學生がすらすら讀むというのを見て、本當に世の中變つたと言われた。これは時代がそう進んだのだと思いま

す。ということとは、結局西洋に始まったものが東アジアで受けとめられる。そうすると、東アジアでは、まだ今は初發の段階だけれども、東アジア中心の研究が西アジア、南アジア、アジア全體を覆うものという形で確立されつつある、という關係ができてきている。

東アジア中心の東洋史が、アジア全體をおおうアジア史へ、と變容してきた過程は、「東方學」をはじめ、斯學の學會誌の掲載論文を一瞥するだけで大略をつかめると思ひます。

ところで、近代というものを考え直したら、やはり西洋が世界を席巻した時代である。これは間違いない。しかし西洋が地球全部の歴史を代表することはできない、これも確かです。西洋が新しい科學をつくつたのですが、他地域は自らの文化基盤の上にそれを受容したのであって、現に東アジアの歴史一つとっても、漢字はいまだに使われつつづけているわけですね。歴史はどう變わろうと、これからほとんど變わるでしょうが、今までのことを消すことはできない、現在が過去の集積の上にあることは絶対確かなわけですね。としましたら、その過去の集積をどんな形で受けとめるかというのは、どの時代のインテリゲンチヤ、研究者にとっても必要なことである。

それは、日本學をどう位置づけるかとはまた別な話として、日本における東洋學は、西洋に對する東洋學ですから、本當は非西洋を全部含んでもいい。しかし歴史的には日本の場合、中國を中心に、中國からより廣い地域を把握するような形で編成されていった。そういうものとしてあるというふうには思っています。

ですから、これからは何といつてもアメリカナイズするというのがグローバルゼーションの本身である、かのごとく言われています。そしてどの地域でも文化傳統や生活様式は變化していく、しかしその變化の仕方は、もとのものを踏まえた變化でしかあり得ない。傳統を踏まえたものでしかあり得ないということですから、今後の地球上の文明配置という面と同時に、地域性というものをよりそれぞれに残した形で、しかもそれが自分たちの存在意義を主張する形で出てくるはずである。そうでないと意味がないであろうということから、我々のやってきた東洋學、それはアジアをおおうものとなつてきているのですが、それはやはりあつてしかるべきである。その場合必要なのは、文獻學的なという

のは、その文献を非常に狭く考えるより、文献を核とする學、つまり言語、そしてそれを文字化したもの、それが記録媒体に残されたものを基礎とする學であって、そのような學が、政治的に冷遇されることはあっても生命を失うはずはない、というふうに私は思います。以上です。

戸川 議論の基礎になっているのは、最も端的に申しますと、大學の學科とどういう人間をリクルートしているかというところなのですから、ちなみに一番そういう點で先端を切っているような、どういう點で先端を切っているかというところは考えようによって違いますけれども、東大の教養學部に総合文化研究科という大學院があるのです。その中のカリキュラムをお話ししますけれども、この中に「東洋」という言葉は全く出てまいりません。地域研究の中にも、アジアというのはありますし、それを擔當している人のご出身は、國史や東洋史を出られたり、中文、中文を出られた人がいるのですけれども、こういう名稱をもって學生を指導しているということをごらんください。

こういう制度から、今言われたような東洋學研究の傳統的な方法も含めまして、どこで

そういうものを鍛え再生産していくか。これは大學院ですから、研究者養成の一番最後の段階を押さえて擔っているカリキュラムです。これに合わせて、ほかの大學でも、盛んにカリキュラムの編成替えをしています。それで、先ほど桜井先生が言われたような悲觀的な状況の中で、東洋學そのものをどのように保持していくのか、どのように再生産していくかということがあります。

では、吉川忠夫先生、どうぞ。

吉川 私は京大の東洋史を卒業いたしましたし、七年ほど前までは人文科學研究所のいわゆる東方部に所屬しておりました。それから、一時ある私立大學におりましたときには、文明アジアコースというところにおりまして、東方、東洋、アジア、それぞれに何か名稱だけそういうところにおったわけでありますが、あまり自覺してきちんと東方、東洋、アジアというものを突っ込んで考えたことがなかった。それが單なる地理的な概念ではないことはもう間違いないと思うのでありますが、お恥かしいことに考えたことはございませんです。私は一應中國を對象にした學問をやっていました。

そして、もう随分大學を離れまして、現在

もう一つ、日本學なのですけれども、きょうはご出席になっていない井波（律子）先生に伺いたかったのですが、あの方は國際日本文化研究センターの所屬ですが、しかしあの方はあくまで中國學ですね。あのセンターの中で中國學というのはどういう位置づけを與えられているのかというようなことを伺いたかったのですけれども、残念ながらきょうご缺席で直接確かめるわけにいかないのですけれども、東方學會が日本學を表の顔にしようというときに、そういうことを少し考えてみる必要があるのではないかと考えています。

戸川 ありがとうございます。みんな本質的なことでして。しかも確かに中國からの留學生が中國自身のことを日本に學びにくるというの絶えません。日本における中國研究というのは日本學の一部だというふうに考えるかどうか。私、この間東大中哲に出された學位論文を見ました。北京大學からの留學生で王國維の研究です。王國維は帝大文科が哲・史・文三學科に分かれた頃に来て、その倫理學の中島力造教授からショーペンハワーについての講義を聴き、得た知識から初

の學生さん、特に研究者志望の學生さんと接觸するチャンネルというのはほとんどない、皆無に近いのでありますので、あまり皆さんのおっしゃるような深刻な状況も十分によく理解できない點がございました。これから申しますのは、要するに老人の夢物語みたいなこととでございます。

最近の學問というのは大變専門化、細分化していると思うのですが、中國學に關しまして、過去の中國の學問のあり方の中に、何かそういうものを少し救いというか、新しい光明を見出す方法がないかというふうに考える次第です。つまり中國の學問の「經」「史」「子」「集」という分類がございますが、さらにもうちょっと古い言葉を使うと「玄」「儒」「文」「史」という分類がございますけれども、あくまで努力目標であるけれども、何かそういう學問を總合する、そういうことを目指すべきではなからうかというふうに考えています。全く見當外れかも知れませんが。

そういうことは最近いろいろソフトがございます。文獻の檢索が非常に簡單になっております。中國の我々の先輩の偉い先生であります、中國學というのは要するに典調

めは哲學に入り、それから文學に移って演劇のことをやる。後半は史學に入っていく。影響を受けるのは、清末の中國から明治日本の大學から得たことを、彼女はその博論で丹念に詳しく書いていく。擬古玄同とか顧頡剛とか、郭沫若に至るまでの、そういった近代中國の歴史學の系譜を書いていくのですが王國維が刺激を受けたのは、新興日本の大學制度の中の新しい哲・史・文三學科の學問體系だということを指摘しているのです。その博論を提出した女子學生は本ばかり読んでいたとみえて、喋る日本語はたどたどしいけれども、きれいな文章を書きます。中國からの留學生にとっては、やはり日本學だと思っ

けれども、日本學のことがいろいろございいますが、これは私の知っているごく狭い範圍の知識ですけれども、中國から中國人で日本へやってきて中國學をやる人が結構いるのですね。必ずしもそれが、中國の新しいことだけでなしに古いことをやっている人もいます。これは池田秀三先生にお伺いしたいのですけれども、僕は確かめたことではないのですけれども、どういう意圖でやってきているのか。中哲にそういう學生さんかなりおりますでしょう。それは後でまた教えていただいたらいいのですけれども、そういうことを一體どういうふうに考えたらいいかというのの一つで

池田（秀） 確かに私のところには、絶えず間なく留學生が研究生もしくは正規の大學院生として入ってまいりまして、日本人學生より時には多い状況を呈しています。多分他大學も似たようなところだろうと思います。どういう経緯で来ているか、一々身元調査はいたしておりますが、ただ中國から直接私のもとに来る事は少ない。ほかの教員のところとか研究室あてのネットから来て、先生こんなが来てますけどと持ってきてくれたりする

ことはあります。ヨーロッパの方からはいきなり私のところへ、おまえのところで勉強してやるから奨学金を用意して待っておれ、というところでもないものが来たりするのですけれど、中國の場合は直接というのは非常に少ない、大體来るのは日本國內から發せられた手紙。つまり何らかのルートで日本へ来ていて、どこかの大學の研究生になり、どこかの日本語學校が何かに入って、その上で私のところへ来て勉強したいと。どうして知ったかというと、ネット検索で日本にある中國思想史關係の大學をずらっと見て、その教員を調べて、それで多分先生のところが一番いいからと言ってくるのです。ただ實は必ずしもそうではなくて、おそらく何人もに手紙を出しているに違いないと私は踏んでおりますが、ともかくそうやって會ってくる先生のところへ話を聞きにくる。私は當人に勉強の意欲があつて經濟的に何とか……みんな非常に苦しい生活しているのが多いです、何とかやっていける見通しがあるなら、研究生で認めて、その能力とか將來性があるようだったら大學院へ入れる、というコースをとっております。ただ訊いてみますと、最初に日本に來たときは、やっております學問はみんな違

います。

中哲を最初からある大學でやってきて、さらに上を私のところ（大學院）でやりたいというのはごく少なく、社會學の勉強に來たとか、政治學の勉強に來たとか、經濟學をやりたいのとかという。ではなぜ中國哲學をやりたいのかというと、そうやっているうちに自分が、平田さんが言われたように中國人である、中國人のアイデンティティに目覺めたというのが多いですね。だから、どうしても自分のルーツである中國古典というものを知らなければならない、今後中國人として、母國に歸るにしても日本で就職するにしても、はっきり見えてこないということを言ひまして、中國人の留學生の場合は必ずこの勉強を通じて得たものを中國の改革開放、祖國の文化發展に生かしたいと。日本人の學生に志望動機を聞いても、日本の文化發展に盡くしたいなんていう人間は一人もおりませんけれども、中國人は必ずそう申します。それはうそではないと思います。もちろんそう言わないと對外的にもぐあいが悪いところがある、とは思いますが。

ただやはり、合う合わないはありますし、手紙が來た段階で、うちでは古典學的なやり

方をやっているから、あなたの希望に合わないと思うよ、といった場合も、それでも來たいというのと、いや、それではもう、いつてあきらめるのと、兩方ありますけれども、それでも残った者は何とか京大の中哲の傳統的な學問を一應は身につけて、研究者のレベルにまで達した者もおります。

ただ、一つ氣にしておりますのは、はっきり學生が不満を漏らしておりまして、日本は文學部系の奨学金とかスカラシップが極めて少ない。そして、少ない上に中國から來て中國人で日本で中國學をやっている人間はレベルが低い、という認定を今まで受けているらしい。つまり、中國人がなぜわざわざ日本へ來て、しかも中國古典の勉強なんてするのだ。多分それは本國ではやっていけないような連中だから日本へ來てやっているのだろう、と思われているのではないかいという不満を、常に漏らしている。それは事實かどうかは確かめておりませんが。ただ、私はいくら推薦狀を書いても非常に當たりにくいことは事實です。だから、そのことは大變氣にしております。

戸川 そうですか。それでは、木田章義先生。

木田 東洋學の理念なんだろうと、これは私には何もわかりません。東方學會の理念の間違ひではないかと思つておりました。東洋學の理念なんて、こんな幅廣いことを理念化できるということはまずないのではないかなと思ひますので、きっと誤植だろうと思つておつたのですけれども、間違へではないのですね。

戸川 誤植ではないのですよ。

木田 それについては何も言うことはないのですけれども、東方學會にいろいろ問題があるというのは、どういう問題があるのか、はつきりわからないのですけれども。例えば學會員が減ってくるとか。

戸川 具體的なことですか。いや、それはここは推薦制ですから、會員確保という點では安定しているのですけれども、ただこの基礎になっている、先ほどから出ています各會員の方々が屬しておられるそれぞれの學會から出てくる、そういう人たちが少なくなる。木田 東洋學全體の衰退ということですね。

戸川 そうでしょうね。様變わりして、別方向に押し上げているのかもしれない。木田 そのあたりがはつきりしない。ど

ういうふうな意見を言えはいいかわからなかったのですけれども、學會というのは五十年ぐらいたつと、會員が第三世代に入りますので、ほとんど歸屬意識がなくなつてしまつて、制度疲勞を起すといひますか、硬直化してしまひますので、そのときには何らかのカンフル注射みたいなものは要すると思ひます。もともと東方學會というのが、先ほどおっしゃつていたみたいに、學會の上に乗つた學會というふうな形でありますから、會員を學生にまで廣げて、ほかの一般の學會と同じようなレベルで競争したらあかんのではないかな、という氣がするのですけれども。むしろ、それぞれの先生が歸屬意識を持つて、ちょっと優秀な學生が就職したら推薦して、入れと、いう形で後繼者を育てるといふやり方をするのが、恐らく一番効果的ではないかと思ひます。

戸川 今までもそうしてきたわけですから。

木田 そんなに増えていないということですか。聲をかける人が少なくなつたということですか。

戸川 いかげなものでしょう。今の推薦制は別に變つてないのですけれども、會員そ

のものが全體として伸び悩みということですよ。それともやめる人が多い……。

柳瀬 やはり、最近會員で顯著に見られるのは、高齢者になるとやめていかれるというケースが多いことですね。定年になりましたのでやめさせていただきますという人が、多いということですよ。若い人はそれぞれ推薦を受けて入ってきています。しかし會員が飛躍的にふえないというのは、やめていく方と入ってくる方がほぼ同じぐらいのバランスになつてしまつているので、一五〇〇人ぐらいいかなかなか増えないのです。

それからもう一つは、數年前の理事會で決議しましたように、三年間會費を滞納し、こちらがいろいろ連絡しても全く返事がない方は除名し、名簿から削除するということもやっております。實質減っているということはありません。とにかく最近顯著なのは、大學の勤めをやめたので退會します、という例が非常に多いということです。

池田(溫) 會費を三年以上滞納してやめた會員のリストは事務局にありますか。

柳瀬 リストはありませんが、退會されても、各會員のカードは大切に保管していますので、それを調べれば判ります。

木田 會員數をふやしたいという意向ですか。

柳瀬 それは戸川先生ともよく議論しているのですけれども、東方學會は傳統的にプレステージのある學會で、高いレベルを維持するというのがまず一番大切なことではないかと思ひますね。ただ會員をふやせばいいということではないと思ひます。例えば日本學・日本研究ですと、今の状況では日本研究の方が東方學會に入っても、具體的なメリットというのは餘りないわけですね。そうではなくて、東方學會に優秀な日本學研究の先生たちが集まって、そこでいろいろ企画を立てて、その企画に對して外側から、外國の世界各地の日本研究の人たちがそこへ参加してくださるということであればいいので、組織の中に日本研究者を若手の學生を全部、入れなければならぬということではないと思ひます。ですから、若手の研究者の優秀な方をどんどん推薦していただきたいのですけれども、とにかく會員をふやさなくてはならないというのが絶對的なプライオリティになるとは私は考えません。でも、これは私の考えですから、必ずしもすべてではないと思ひます。

木田 弟子を育てられる立場にあるのか、そういう環境にある人というのはそんなに多くはないでしょうから、東方學會に属している人みんなに推薦せよということは無理だとは思ひますけれども、そういうことを常に心がけていくようにしていって、少しは違ふとは思ひますね。

柳瀬 そうですね。優秀な方をご推薦いただくというのは、これは一番いいわけ。

木田 私の知り合いの會員たちはだれも推薦したことはないようですから、自分が東方學會會員だということを忘れているのだと思ひます。やはり歸屬意識ですね。五十年ぐらいたったら歸屬意識がどんどんなくなっていく。自分の學會という意識がなくなっていくという傾向が強いものですから。

私が属していました「國語學會」は、ほぼこの東方學會と同じころにできているのですけれども、やはり五十年たったころから國語學というものがどんなものであるかを知らない日本語研究者がたくさん入ってきました。例えばスペイン語をやっていたりフランス語をやっていた人が日本語と一緒に研究する。だから國語學會に入るといふ形で、國語學的な基礎を持たない人がたくさん入ってきたわ

けです。それで學會の名稱も「國語學會」では不満に感じられるようになり、名稱變更の投票があつて、「日本語學會」に変わってしまった。國語學が國語學・國文學でセツトであることを知っている會員の数が少なくなつていたのでした。

私の場合には、國語學會の機關誌が横書きになつた時に、自分の學會ではなくなつたと感じて、評議員の任期が終わると同時に退會しておりましたので、名稱が変わつても、特に感慨はなかつたのですが、まだ國語學會という名稱の時にやめられたので、安堵した記憶があります。やはり學會はどうも半世紀ぐらいたつと疲勞するのと、歸屬意識を失っていくという時期があるみたいです。國語學會は、日本語學會になつたので、そこからまた全然違ふ歴史ができてくると思ひます。

ただ、名稱の變更は、これまでの歴史との決別でもありますから、そこで失われるものも少なくありません。たとえば、資料を原典、現物から、それがいつの時代のもので、この墨だったなどの時代であるとか、墨と紙が合わないとか、そういう形で現物を見て、これは確かに間違いない資料であるとか、それからこの文章はこう讀むべきであるとかと

いうふうには、活字化する前の資料の整理をする技術、この技術が國語學とか國文學になるわけですね。

これまで學會の中心であつたこれらの専門家は、これからは學會の中心ではなくなるといふ意味も含むわけですね。それが當時の國語學會員の三分の二の意志だったわけですね。

ただ、歴史的研究をしている研究者の数も相對的に減つてきています。つまり、國語學會の名稱の變更は、背景として國語學者の減少という背景を持っていたわけですね。

學會を、活発なまま、また従来どおりに維持してゆくことは、なかなか難しいんですね。

今は活字化されたもの、インターネットで検索できる資料も多くなっていますが、そういう資料の基本作業は、ほとんど國語學・國文學の人間がやってきたわけです。これだけ活字化されたものがあれば、日本語の研究には充分と思う人が出てきますが、實際には、辭書類とか抄物をはじめとしてまだたくさん整理されてないものがあります。そういったものを整理する人がいなくなってきたという状況です。

抄物というのは、五山の坊さんたちが漢籍

や佛典を研究して、それを講義したノートなどのことをいうのですが、講義の記録ですから、當時の日常用語がたくさん使われているわけですね。そういう貴重な資料はたくさんあるのですけれども……。

柳瀬 この間、兩足院で拜見した……。

木田 そうです。建仁寺兩足院のときのあの資料です。ああいうものを整理する人数が足らなくなつてしまつたのです。

我々ができることというのは、自分の責任の範囲で後繼者を育てることだと思います。

それで兩足院の調査でも關西の五十六人の院生を連れていって、その技術を伝えながら研究を続けるということをやっているわけですね。ある程度世の中の流れというものもありますので、個人の力ではどうしようもないという氣はするのですけれどもね。

抄物でも、蘇東坡や黄山谷の注釋などは大部なものになり、しかも内容も難しい。坊さんの字は癖が強いですから、それを讀み解きながら、原文と對照したりする作業は大變しんどい作業です。署名が無いものが多いので、年代を推定するためには、紙、墨色、字體などの知識も必要になってきますし、其の資料の傳來過程も調べなければなりません。

そういうことになってくると、そんな面倒くさいことをするよりは、「源氏物語」をCD-ROMで検索しながら論文を書いていった方がはるかに樂です。そういう研究も楽しいし、それで業績にもなるので、若い人がそっちへ流れていくのは仕方がないと思ひます。

そんな中でも個人個人の責任で、つまり自分がいる立場に應じた責任の範囲で、後繼者を育てていく、次の世代を育てていくという意識を一つ持つことですね。結局はそれしか、東洋學にしろ日本學にしろ、研究水準を維持してゆくことは出来ないでしょう。

世の中というのは輕佻浮薄に流れていくといつたらおかしいですけども、今まで大學關係で、改革してうまくいったものはほとんどないわけですね。みんな失敗作と言っているわけですから。そういうことを考えていくと、自分ができる範囲というのか、自分の責任の範囲というのをしっかり見据えて、化石のように生き残る、というのが私の立場です。みんながどんなに変わつても、今までやってきたことは決して間違つてないし、これはやらなければいけないことなので、このやらなければいけないことを次の若い連中に

傳えなければいけないというのが、私の基本的な考えです。化石のようになって、だから何を言われても平氣な顔をして、あるときには花が咲くことがあるだろうと考えておりますので、私の場合は私の責任の範囲内に火の粉がかからない限りは何も言わない。火の粉がかからない限りはもう好きなようにしなさい、ということですね。

本題にもどりますと、結局、東方學會がやるべきことというのは、この人とこの人に會員になってほしいとかいう形での働きかけというのをやっていかなければいけないのではないかなと思います。その人を何かの役職につけてしまって、仕事をしてもらって……、そうしたら歸屬意識は出てきます。仕事をしなかったら絶對歸屬意識は出ませんので。歸屬意識をつくっておいたら、今度はその人が、ちょっと優秀な人が出たら、「おまえちょっと會員になれ」というような形になってくる可能性があります。十人に仕事をさせたら二人ぐらいは歸屬意識を持つ人が生まれる。

戸川 皆さんにやっていただいているのはそのためでございます。(笑)

木田 私も歸屬意識はあまりありませんが

……。

戸川 東京大學など、講座制の大學では茅誠司さんが総長になった、そのころから、まづ工學部から始まって、講座の名稱やカリキュラムも變えていって、どんどんと。それにツイて理學部、農學部とつづいていくのです。工學部に鑛山學科というのがあった、そういう名稱だとだれも駒場から進學しない、金屬工學と名稱も改めていきまして、本郷からリクルートするのに、時宜的につぎつぎと名稱を變え駒場(教養)から進學する以前から次第に激しく宣傳してきました。自分たち専門分野の學問についての意識が高いとか社會需要に敏感に對應してきたわけです。理工學方面は、それがなぜ文學部に起こらないのだろうとつねづね感じさせられましたね。

さらに言うと、講座制のいいのは、學問の體系が十九世紀末の價值觀から來ているのだが、世界の中でその學問が必要としたら、その文化に直接關係ない環境でも、定點觀測船のように一定の學問を保持していかななくてはならない、割り當て分擔があるのだ、と。例えばと言って、君たちのやっているその中國哲學だってそうじゃないか。これは學生が

です、理科關係の人もね、そのために人文學があるのだと。そうしたら、理工系から、定點觀測だけじゃなくて、その意義についてもっと強く主張しろと、いうようになってきています。

だけど、そういうものが別に必要でない、という考え方の人もいまは壓倒的なのではないのですか。はっきり言って一番極端なのは都立大學、名前を變えて首都大學東京でしょう。人文學部をつぶしてしまっただけじゃないですか。もっと實用的で、現實の生活空間の中に生きていく知恵みたいなものがありさえすればそれでいいという、そういう價值觀でやっています。かつての文化の源泉になっている文獻・文物を讀まなくてはいけない、そういうふうなのがでてこないのですね。

柳瀬 それはしかし、一つには先生方にも責任があるのではないですか。

戸川 それを聞きたいものです。

柳瀬 オビニオンリーダーみたいな人がいないということですよ、今ね。梅原猛とか山折哲雄のような人たちがオビニオンリーダーみたいになつていて。あれはしかし意外に利くのでして、割合とジャーナリズムに乗る人の意見というのが入ってくるのです。文科

來なくなつて學術史的に必要なのだから、こういう講座はなくせないのだと。茅さんの前、矢内原忠雄總長が、文學部の進學の寡少な學科の研究室に向かつて云われた、と聞いています。確かに講座制の割役を果たしていることがわかります。

しかしその學問の價值觀というのが二十世紀の初めごろの講座に象徴されているわけで、それをずっと踏襲してきたのだけれど、いまや理工といわず人文社會の學術世界、それを組みかえていくことになって、そしてそれが大學院大學になつてもう決定的になりました。教養課程というようものを改廢するというか、どんどん大綱化して組み替えてきたものだからね。だから、そういう變形する中で、東洋學というようものがどういふふうな意味を持ちつづけていけるのかということと反省させられたのだと、私は思っているのです。もう二十年ほど前のことですけどね。

その中で、一體日本の近代化の果ての、二十一世紀に向かつての學術、はっきり言って人文學全體ですけれども、その中で東洋學的なもの、具體的に先ほどから言われている文獻學という意味ですね。要するに「文獻」

省やなんかに入ってくる、浸透してくる。ただ、東洋學者の方々の發言が極めて少ないということは非常に残念だと思いますね。もう少しオビニオンリーダーみたいなになって發言していただくというのが必要なのではないでしょうか。東洋學はいかに必要であるか、文獻學がいかに必要か、中國古典を學ぶことがいかに人間を學ぶことになるかというような觀點から、それはインド學でも同じことですが、そういうことをもっと聲高に發言していただくという方法はないのでしょうか。

戸川 大學、學術世界の中心になつていて委員会、教育審議會、いや……。

柳瀬 學術審議會。

戸川 學術審議會ね。わたくし學術會議にずっと出ておりましたけれども、そういうふうな中に東洋關係の人というのはだれも入らない。

柳瀬 だからその邊からおかしくなつていくのです。

戸川 歴史關係の人はおられるのですけれども……。

柳瀬 學術會議から東洋學研連が消されてしまったというのも、これは全くけしからん

といったら書いたもので狭くなります、今で謂う「文物」と言っているのです、發掘出土してくる「物」とそれから人間の言語を書いた「文」と、そういうものですね、人文學というのは、「文物」そのものを對象にして、史的に、時間的經緯において展開してきたものを、どのように解明していくかという方法なのでしょう。

それは歴史觀とかそういうふうな觀點によって、對象資料をひん曲げたり素直に讀み取ったりというのでありますし、それに多分に技術的な面もあるわけですから。

東洋學というか、日本學はちょっと面倒ですけれども、それをもひくくするめて、史的なものの連續性というのを追究しているわけです。文化というものは、何らかの形で相互につながりがあるという、「文物」によってそれを復元していこうという考え方です。人文學としての東洋學はそういうふうなものとして歴史的にいろいろな知恵をつけ、讀解できなかつたものを讀解するような方法を見つけてきましたし、時代的にどのようにその解釋が變わるかということもわかつてきているわけです。現在の我々の文化を解明するのに必要な學問だ、と自分も言い、人も言うわけ

話ですけれども。

戸川 そういう観点でもって、別に政治的な動きというよりも、教育とか研究というふうな点でのアカデミックな構成という、それ以前の教育と研究の中で、發言するというふうな人は、私の知っている限り、どなたもいませんですな、今。それは天皇家の親王様の名前つけてみたり、元號の出典がどうだというのなど、その程度で引張り出されることはありまして、はっきり言って今言った科學の體制をどのようにするかという點で、文科系で加わってくるのは法科系の人たちです、やはり。この日本の學術行政的な點できちっとできる人が加わっていない。

池田(秀) 新聞の文化欄には必ず人文學が大事だということ、單發的ではありますけれども切れ目なく出ていますよ。それは出ています。環境破壊の問題も切れ目なく出てきたけれども、結局環境破壊がどんどん進んでいるのと一緒に。もう生態學者は、このままいったら地球環境はどうなるというのは随分前から警告を發し続けていますが、それでもとまらなかつた。人文學も恐らくとまらないだろうと思われまふ。

桜井 發言をしていますよ。非常にたくさ

んの人が發言しているけれども、それがファッションにならないのです。

小川 とにかく出席者全員の意見を伺わないと、いけないのじゃないでしょうか。

戸川 そうです、そうです。どうぞ。徳永宗雄先生。

徳永 もう皆様お疲れのようですからあまり長話をしたくないのですが、最近、東洋學ないし人文學に關して感じた事がありますので、その點について話をさせて頂きます。

昨年の後半にカリフォルニアで歴史教科書問題という事件が起こりました。カリフォルニアの高校教科書にインドの事が書いてあるのですが、その内容に對してヒンドゥー・アメリカン・ソサエティー(HAS)が注文をつけ、記述内容を書き直せと要求してきたのです。

彼らの要求はヒンドゥー原理主義的なもので、古代インドには男女差別はなかったとか、冷静な研究者にはとても認められないものが多くふくまれておりました。そこで、彼らの要求に、歐米の研究者たちが抗議の聲明を出しました。日本からは私だけでしたが、その運動に加わってカリフォルニア州教育委員會にHASの要求を受け入れないよう申し

入れました。これに對してHASはとても怒り、われわれをカリフォルニア州の裁判所に訴え、とうとう裁判沙汰になってしまいました。そこで、被告になったわれわれは一人一人反論の訴狀をつくりカリフォルニア州裁判所にファックスを送りました。結局この裁判は明けて一月にこちら側の勝利として當面の決着を見たのですが、この勝利にはなぜか私は心から喜ぶ事ができませんでした。それは次のような事があったからです。

HASがつけてきたクレームの一つに「西洋人はキリストを神の子と信じているのに、インドのクリシュナ神になると、何故、ヒンドゥー教の神話(つまりフィクションですね)によるとヴェシュヌの化身とされている」という風に説明するのか、それがけしからんというわけです。私自身二十數年間なんの疑いもなくそのように講義してきましたのでその意味がよくわかりませんでした、しばらくして彼らのクレームがかなり堪えてきました。自分はこれまで西洋人の目でインドの宗教や文化を見ていたというのに氣がついたからです。

また、この事件で、私は人文學というのは怖い學問だという事にも氣がきました。人

文學の研究では無意識に他の文化圏の人々の心を傷つけていることがあります。考えてみれば、よその言語や文化や歴史についてあれこれいうのですから、かなり勝手な話です。

これはよほど注意してやらないといけない。人文學は暇人の趣味か道樂と世間では見られているようですが、これはとんでもない誤解で、人文學以上に危険な學問はない。身體を傷つけられても日が経てば直りますが、心の傷は一生消えませんから。

もう一つこの事件で學んだことは、繰り返しになりますが、私がそれまで西洋人の目でインドの研究をしてきたということです。自然科學と異なり人文學では純客觀的な研究はあり得ないというのが私の考えです。それは良いとか悪いとか言う問題ではなく、人文學は事實としてそういうものだということです。文獻學は文獻資料にもとづいて客觀的批判的な研究を行っているように思い込んでいますが、實は決してそうではなく研究者の視點というのがそこには必ず入ってきます。それは必ずしも悪いことではなく、むしろ人文學のおもしろさはそこにあるといっています。文であれ理であれ自分の目で對象を考察する、それがサイエンスですから、視

點そのものは悪いものではない。悪いのは自分の視點に固執することです。

われわれが西洋から學んできた批判的精神はとても重要なものですが、それと同時にものの見方まで西洋から受け入れてしまっているのではないか、インドの歴史と文化を私は自分の目で見てこなかったのではないか、インドを無意識に見下してはいなかったか、このようなことをこの事件で強く感じさせられました。

また、われわれが日本人であるという言語的文化的制約ないしはコンテキストの中でアジア諸國の文化、歴史を研究しているということも忘れてはなりません。その點を充分自覺しアジアの一員として相手に對する敬意をもつてアジア諸地域の言語、文化、歴史を研究する必要があります。相手の文化に對する敬意を缺いた人文學は相互不信と争いの種を提供するだけです。人文學と自然科學はその點で根本的に異なっています。物質に對する敬意を持つ必要はありませんから。

右のことと關連してもう一つ申し上げますと、今日、東洋學に限らず人文學は研究の對象が細分化され閉鎖的な性格をますます強めています。大半の研究者が、よその國の文化

や社會や歴史をばらばらに切り裂いて研究しています。このような要素還元的手法は物質を對象とする自然科學ではこれまで有効でしたが、(生命科學ではもうその限界に氣がついている)、言語や文化や歴史を對象とするときには問題があります。言語や文化の細部は分かっていても本體は理解できません。専門研究は人文學の基礎作業として極めて重要なものですが、同時に對象を相體的に見る努力も怠ってはならない。でなければ、東洋學・アジア研究はもろろのこと、人文學そのものが成り立たない。そのような認識が現在、人文學全體に稀薄になっているのはとても残念なことです。このままでは、東洋學に限らず人文學の將來に悲觀的にならざるを得ません。その意味で、アジアに關するさまざまな専門研究を總合する立場にある東方學會の存在意義は大きく、その役割は今後一層大きくなると考えています。

戸川 ありがとうございます。池田秀三先生お願いいたします。

池田(秀) 大體私の言いたいことは、前の方がそれぞれ言っておられることと變わらないのですが、アンケートにも悲觀的なことを書いたのですが、私個人はもう随分前から

中國古典研究などについてはほとんど絶望状態です。

ただ、本當に危機感を持っているかという点と必ずしもそうでないところは、もともと私が京大の中哲に入ったときから、ゼロ、ゼロ、二で、私が入って一人、そんな状態ですから、學生が數年に一人か二人しかおらんという状態もなれっこで、今學生がかえって學部に毎年一人は來たりして、私らのときより多いかなという感じがですから。だから、その意味での現實の危機感はない。他大學からの大學院入學者がふえたというような問題はありますけれども。

ただ、古典研究の繼續、個人的には何とか頑張りたいと思うのですけれども、制度の衰退とかよりも入ってくる學生自身に古典に対する興味がどんどん減っているというのが、もっとも絶望する理由なのです。つまり制度でもたそうと思っても、もう古典研究とか文獻調べとか、そういうものに全く興味がありません。そのような者たちに幾らおもしろいのだよと言っても、これを振り向かせろに非常に困難を感じる。そこに一種の絶望感というのを持っているということです。

ただ、それはそれでもうしょうがないこと

です。私の知り合いの中でも若いときは全然古典研究をしないフィールドからやってきて、かなり年をとってから中國古典のおもしろさに気がついておやりになって、いい學者になられる方もいるし、トータルでは結局ゼロにはならんだろうから、何年かに一人、変わった人間が出てきて、こういう學問を繼いでくれる人間がいればいいと思っておりますけれども。ただ、それも本當に小學校、中學校の段階で一種の古典文化というものに觸れ合う機會が本當に奪われていった場合、それさえ危なくなるのではないかと心配が一つ。

それともう一つ、何とか研究者は無理やりつくり上げていくにしても、他大學でどんな東洋古典の講座、中國思想關係の講座が、特に古典關係のは削られて、いい若手の研究者が育ってもポストが得られない。ポストが得られないで數年たつとその本人がつぶれます。若手の有望な人が就職できる最低限のポストも削られるおそれがあることに對して、かなりの危機感を持っています。

それでも、まあ何とかなるように多分なっていくだろうし、その結果、古典研究は要ら

んということになれば、それはそれでいいし、アジア研究が古典研究じゃなしに近代研究になって、それでまた日本人のアジア觀が變わっていくのだったら、それはそれでいいことではないかという、個人的には抗う氣はそんなに持っておりません。

その次に東洋學の理念なのですけれども、私、理念を論じるのは大嫌いなのです。日本中國學會で「二十一世紀の中國學のあり方」なんていうシンポジウムをした事がありました。くだらんことしるなと思って私はもちろんそっぽを向いて一切出ませんでした。

何でこんなばかみたいなことをするのだとはっきり思いました。つまり理念なんていうもの、あるいは自分自身にとって中國學がどういうことかというのは、常に學者である限り、今この場でこの二十一世紀になってなぜ自分がこんなことをしているのか考えています。みんな持ち寄って自分の理念を押しつけて、あるいはこれが正しい理念の持ち方です。よなよな、そんなあほなこと言う必要ないので、まともな研究者なら自分で考えておれば済むことです。

だからこの學會でも、本當に學問をきちっ

典研究であれ文獻學であれ、どのような分野であっても、それぞれの仕事をしておられたい。私は確かにここにおられる先生方の仕事の眞髓を理解する能力はありません。自分のやっているのは中國古典の思想關係です。でもそれぞれの先生がどういうことをやっておられて、それがどういう意味を持っているかについては、最大限の敬意を拂っているし、學んでいるつもりでありますから、やはり大事なことは、本當の學者というものがこの學會におられて、みんながそれぞれお互いにどういう仕事をしておられるのか、注意を拂っておれば、その總體が東洋學というものとして崩壊しないで充分一つの連帶を持ち得るので、東洋學はかくあらねばならないとか、かくあるべしというような定義を與える必要は全く無用だと私は思います。

それぞれの學問の自分の水準を高めることだけを志していればいい、だからスペシャリストでいいのです。本當のスペシャリストであつたら、ほかのことがわからないまでも敬意を拂う氣持ちは絶対捨てませんから。スペシャリスト同士で何もわからなかったら、それは本當のスペシャリストでないと思っています。だから、今まで言われたそれぞれの分

野のスペシャリストが集まってやってこれたら、本物の學者の集まりであれば大丈夫だと私は思っている。東洋學の將來とか理念とかそんなものについては心配しておりません。學會についても、今のそういう状態が続けば大丈夫です。

また、私なんかもうでしただけでも、學會に入ったときは歸屬意識なんかない、ただ研究者を志すのであれば一應入っておくが、實利的には論文發表の機會がふえる、としか考えませんでした。今の學生さんがそうやって入ってくるのもしょうがないと思います。

それでも、さっきどなたが言われたように、私も理事にされなかったらこういうところへ出てきておりませんが、役員になった限りは義務は果たさねばとおもいますから、それでいいのではないですか。やはり無理やり入れても續かないものは續きませんし、簡単に人數をふやそうと思つたら「東方學」の論文の採用數を倍にして査讀を甘くすれば一遍にふえますけれども、そんなことはすべきでないことは明らかですから、これはそう心配することはない。

ただ、私個人としては、日本中國學會と東方學會とをどうすみ分けるかは、今もって實

はなかなかわからないところが残っておりまして。時間がないのでここまでにさせていただきます。

戸川 では次に、田仲一成先生。

田仲 私おくれてまいりましたので、皆さんの議論がどういう形で進んできたか、いまだによくわからないのであります。それからアンケートに關してもほとんど答えておりません。ただ、私は、現状維持でいいという意見で、何もやる必要はないというのが結論です。六十周年記念ということなので、ここで回顧せよということだと思いますが、今まで随分しっかりやってきたし、財政基盤も随分しっかりしてきているし、論文の中身は徐々に變わりつつありますけれども、これは當然のことで、學會としては、それらの論文の一つの受け皿としてきちんと維持していくことが必要だと思っております。それ以上、何もこちらから叱咤激勵しても意味はありませんし、從來通りでよろしいのではないかと。

ただ、IT化と國際発信というのだけは、やはり少しは重視する必要があるって、できるだけ、例えばACTA ASIATICAなどは、とにかくネットに載せた方がいいのではないかと。また、例えば學會賞を受賞した論文など

は全文を英譯して、PDFで載せるとか、そういう對外的發信というのは、學會の聲望を維持する上では有効ではないか。やらなければいけないというのではないのですけれどもね。私の意見はその程度です。

私個人は監査役で、特に經營その他については、時々お伺いしていますが、非常に健全財政でなし、危機的状況にあるというようなことは何もないと思っております。

ただ、皆さんのご心配になっていらっしゃることは、それなりによく理解できます。原理的なことがないがしろにされて、學術會議の構成でも何でも應用的な部分ばかりが脚光を浴びる。豫算はどんどんそちらに流れていって、東洋學としては、科學研究費等が非常に取りにくくなるといふ危険性があるということですね。ただし、それは若い人が頑張ると思うのですよ。アプライするのは我々學會ではないのですから。それなりに適應力を持った若い優秀な人たちがいるのですから、あまり心配しないでもいい。ただ、學會としては取りまとめ役ということでしょうか、できるだけ出口を外へつけてあげる、國際的な發信をしてあげる、IT化に向かって力を注いであげるといふこと。少し豫算はか

かるかもしれませんが。私の要望はこのぐらいのところでございます。

戸川 これで大體一通りお答えいただいたのです。私、田仲先生がおっしゃったので、學會としての役割は、全く同感ですけれども。これはもうこの後に伺う豫定のIT化への對應と國際交流の推進の問いに一緒に答えていただきました。

東洋學及び東方學會における 日本學の位置づけ

戸川 ただし、残っておりますのが三番目の日本學の位置づけ。この日本學というのは、國際的に日本の中における特色のある學術研究を扱ってきた東洋學とか東方學というものについて、これがいまや日本學としての東洋學、東方學というふうになりつつある中で位置づけられようとしている。そして、中國から來て、日本への東洋學をやる者が、出てくる、のですが、ますます日本學としての東方學とか東洋學というものがどうあるべきなのか。

ただいま、その點で、桑川先生にご發言いただければと思っております次第です。

桑川 長くても十分程度で終わらせる積も

りですが、少々時間を頂いて、私の考える「日本學」を説明したいと思えます。

個人的な経験からお話を始めるわけですが、一九八一年に、國立シンガポール大學がデパートメント・オブ・ジャパニーズ・スタディーズという學科を立ち上げまして、私がその初代の責任者という事で赴任しました。

學科は日本にかかわる政治・經濟・歴史・文學、それに日本語のコースを提供する、人文系の総合學科という性格のものでした。先ず、この學科名の日本語譯を何とかするかわ若干悩みました。「日本學科」が一番簡潔でいいのですが、それだと「スタディーズ」のニュアンスが弱まるので、長たらしいけれども「日本研究學科」という事に決めました。私はそこで四年ほど勤めて日本に戻りましたが、つい最近先方から連絡があって、學科の創立二十五周年記念の祝典をやるので、私に來て何か喋るように、そしてその題と概要を事前に送るように、という事でした。私は早速「二十一世紀における日本學の展望」という題を考え、英語にして送りましたが、その「日本學」の部分には、ジャパノロジーという横文字を當てておいたのです。すると、先方から折り返し注文が返ってきました。

た。ジャパノロジーというのは、どうも馴染みの無い言葉なので、講演は、先ずその定義から始めて欲しいという要請でした。たしかに、それは避けて通れない問題なのでした。ジャパニーズ・スタディーズ、ジャパノロジー、日本研究、日本學というふうな言葉を並べて見ますと、それらの意味領域は、どう重なり、どう食い違っているのか、どうも掴み所がないように感じられます。一つの解決方法は、いわゆる日本研究の歴史的發展段階に應じて、ある時期のものをジャパノロジーと呼び、ある時期のものをジャパニーズ・スタディーズと呼ぶ、というように使い分ける事ですが、これも譯語まで考えると再び混乱してしまいます。

そこで、今日のところは、用語の定義に深入りする事は避けて、とりあえず「日本學」という名前前で代表させて置きますが、先程ちょっと觸れましたように、「日本學」の「學」としての存立理由がまず問われなければならない問題であります。

例えば、政治學、經濟學、歴史學、文化人類學、宗教學といった、縦割りの學域のそれぞれに於いて、其の學域の一部として、日本政治、日本經濟、日本の歴史、というよう

に、日本の問題が論じられるのは普通の事です。が、では其の「日本關係部分」だけを取り出して横斷的に束ねれば、それで、「日本學」が出来上がるかと言うと、もちろん、そんな事はない。獨立した「學」である事の要件として、(一)その對象が、他と區別可能な、ひとまとまりの事象である事、(二)それ獨自の方法論を持つ事、(三)自己完結する體系を持つ事、というような項目を考えた時に、本當に「日本學」といふものが成立するかどうか、は大いに議論のあるところだろうと思えます。私自身もまだ充分に確信が持てる段階ではありません。

ただ、こんな事は考えるのです。法の世界に「手續法」というのがあって、それもまた「法」であるように、學の世界にもまた「手續學」とでも言うべきものがあり得るだろう、そしてそれもまた「學」である、という意味においてなら「日本學」という「學」も認められていいのではないだろうか。いわばそれは「日本文化」特に「傳統的日本文化」を理解するための技術の、研究と教育の領域であります。今日ここで「日本學」と呼びますのは、こう言った性格のものだとご理解願いたいのです。

先程「國籍のある學問」という事に觸れましたが、實は私は、「日本學」は、第一義的には「國籍のない學問」でなければならぬと考えております。例えば近代醫學というものが、世界中、どの國、どの大學で學んでも、また、何國人の先生が教え、何國人の學生が學んでも、同質のものでなければならぬように、「日本學」も、それだけの客觀性が保證されなければならないと思っています。

ただし、従事する一人一人の學者は、當然それぞれの母文化、つまり文化的國籍の影響を受けていますから、これは計算に入れないといけないし、計算に入れた上で、逆に大いに利用しなければならぬ。例えば、日本人の日本學者が得意とする領域、日本人の日本學者にしか分からない日本學の領域というものもあるのではないだろうか。だから、そこところは、どうしても異國籍研究者との共同作業が必要になります。

また、第一義として申した「無國籍性」と矛盾するようですが、研究機械や大學の所在地によって、その「日本學」にある程度の特色が出るのも當然のことではあって、同じ醫學の類推を用いれば、熱帯醫學のセンターは

アラスカにあるよりは矢張り熱帯にあるのがふさわしいように、日本學のセンターは、少なくともセンターの一つは、日本にあって、その特色を出すのがふさわしいだろうと考えます。

さて、日本學の内容ですが、私は今、日本學の教科書的なものを編んでいるのですが、それは古代に始まり、一九五〇年代を下限とする主要文獻資料の抜粋で、そうした歴史的展望が「日本學者」の素養の根底にあるべきだ、と私は考えております。

で、以下に述べますのは、「日本人の日本學者」に私が求めたいと思う諸能力の一覧でありまして、これを目標とするような學生の養成機關が大學や大學院に設けられる事は私の夢なのですが、なかなかそれは難しいようです。その能力と言いますのは、

- (1) ニカ國語以上の外國語運用能力(現實的には、英語ともう一つの外國語、特にアジアの言語)
- (2) 日本古典資料の解讀能力(漢文・經典・變體假名・古文書などを含む)
- (3) 日本文化全般にわたる(假に淺くても)正確な知識と説明能力(特に、神道や佛教について)

疑わしいという感じがしまして、どうも日本學という言葉を知ると何となく居心地が悪いところがあります。

實際私は、日本とその外の世界との關係を研究しているものですけれど、いろいろ調べていくと、日本人特有のように見えるもの、實はそれはアジアからの影響、そういうもので説明できる部分が結構たくさん出てくるところがあって、私はその方がおもしろくて、つまり日本獨特というように一見見えるのだけれども、解明していくとそうではないようなものを發見していく、そういうところに外との關係を究める意義を考えているようなところがあるわけなのです。

そういう立場からすると、東方學會の中で私が何かできるとしたら、日本學というのではなくて、今の日本文化を形づくっているアジア的な要素ということを考えていく、そういうものではないかという感じが一方です。ですから違和感も同時に感じざるを得ないというのは、こういうところにあります。

糸川 私もその點、日本學ということを言うときに、確かに一つのある戸惑いという、躊躇があるわけです。私が考えているの

- (4) 現代日本社會に對する知識と分析・説明能力(外交・政治・經濟・社會など)
- といったわけで、これは従来の「國文學」などとはかなり異なる性格のものです。

最後に申したいのは、それでは東方學會における日本學部門はどうあるべきかという問題です。それが、世界での日本研究の中心になるべきかと言うと、そうではないというのが私の意見です。京都の國際日本文化研究センターとか、各大學にも、今いろいろな日本研究部門があり、それらは相應の豫算とか人員を擁している譯ですから、大規模な仕事はそういう所にお任せするのがいい。東方學會の中での日本研究は、そこまで手を伸ばす餘裕もないし、その必要も無いだろうと思えます。初めにも申しましたように、私のような立場から考えますと、この東方學會が非常にありがたい存在であるのは、そこに中國學とかインド學とか、さまざまなアジア學の方々が集まっておられて、そこでの現在の問題は、何であるかというような事が話し合える、そしてそこに日本學の展望も開けて行くし、國際的にも交流ができる、といった環境がここにあるという事實なのです。規模は小さくていいが、そういう、アジアを舞臺とした學際

は、一時はやった日本ユニーク論ではない、日本はこんなにユニークな國だからそれを研究しろということではなくて、それぞれの地域にそれぞれの學があつていい。そうすると地域學(リージョナル・スタディーズ)とどう違うかということになりますけれども。

日本文化の中で、外國からある刺激が來た場合に、こういう反應が出る。また別な刺激が來たときには、また別な反應が出る。その二つの反應の間にどれだけの共通性というか、日本的性格があるかというふうなことからすけれども。先ほど觸れましたが、日本學、あるいはジャパノロジーという言葉これ自體を、いま市民權を持つて主張できるかどうか、それはやはりまだだし、できないのかもしれない。今おっしゃってくださったように、これは十分検討しなければいけないことだろうと思います。

もう一つは、繰り返しますが、日本ユニーク論に陥らないように、一種の、極端に言えば愛國的な學問とはむしろ逆のことを私は考えているつもりなのですけれども。つまりできるだけ相對化し、客體化したところの日本というものを考えているわけです。しかし、やはりどうしてもそちらに誤解されやすい要

的・國際的な「日本學」が東方學會日本部門の特徴であつていいのではないでしょう。以上、長くなりましたが、私の「日本學」をめぐる考えを述べました。

村井 いまお聞きして感じたことなのですけれども、東方學會のメンバーとして東方學會が展開する日本學というものを構想して、具體的にどんなことができるかということをはじめにお考えになった、そういう意味ではすぐ感銘を受けたのですけれども、ただ私自身は、日本學というものが何かあって、それを日本のことをやっている立場から東方學會に何かを還元できるとしたら何ができるかという、その何か固まった日本學なるものがあることが前提になるかどうかそのこと自身に疑問を感じざるを得ないのです。

そういう場合、日本というのはほかの地域とは異なる特別な要素があつて、それが何かを説明するのが日本學である、というような發想という氣がするのです。先ほどおっしゃった日本人でなければわからないところは、日本文化を母文化とする研究者がやるのだ、というような考え方というのは、そういうところを感じるのですけれども、果たしてそういうものが實在するのということ自身

素を多分含んでいるのだらうと思います。

戸川 理念の言わばなしでいいというふうなものに勇氣づけられまして、皆さん自由に發言いただいたのですけれども、この日本學の位置づけというのは、はっきりしたイメージが形づくれない……。

池田(溫) 國際會議で、例えばICANASの中にもジャパノロジーというような部會が、ずっと十九世紀の後半から今日まで續いています。日本研究自體は、ケンペルなどオランダ人が日本のことを傳えたところからだんだん發達してきているのだと思えますけれども。ですから存在することはもう自明だと思ふのです。地域研究で當然あるわけなのです。

そこに住んでいる人がやっても、外から客觀的にやっても、それはいずれも對象は日本社會であり日本文化であり、特に意識して理念を云々する必要がどの程度あるか。もちろんそういう關心を持たれる方は大いに書いてくださったらありたいわけですからけれども、みんなが書かなければならないということはないのです。

戸川 では、美術史でシノワズリーがあるように、ジャパノロジーのことが昔から言わ

ですから、日本史つまり、國史が先にあって次に西洋史があつて、これを受ける形で、明治期に那珂通世の『那珂東洋史略』、桑原隲藏の『中等東洋史』、大正初期に東京（お茶の水）女子高等師範學校教授の松井等というかが中等學校・高等女學校用に中國史教科書を書いたのですね。それに『東洋史概説』という書名を使ったのが、契機となつた、教育界に定着しようです。それは主に中國史ですけれども、東洋史という用語は教科書から定着した。つまり教育制度の方から支えられている一面もあると思います。

戸川 どうも最後までありがとうございます。私は主に中國史で持っている東洋學の歴史的な性格と同時に、現状についての、いろいろな批判的な意見をたくさんいただきました。

きょういただきましたご意見は大變貴重なもので、特に私個人には、日本學というものについてあいまいな形ではありませんでしたが、一つヒントが出たように思います。

―丁化時代への對應 國際交流の一層の促進 東方學會の經營組織の擴大強化

戸川 長時間ありがとうございます。そ

ろ次のテーマに移らせていただきます。

先ほどからも出ておりますように、學會としての仕事として、東方學會が國際東方學者會議 ICES を開催し、その會議報告の「紀要」を刊行し、また英文誌の ACTA ASIATICA を年二冊各研究分野の最新の研究成果を英譯して海外に発信することで國際交流を果たしてきた役割、それは誇るべきものです。現在もそういう點では世界の主要な學會と、アカデミックな交流をしておるわけですが、ただ、その交流の仕方というのは、最近「情報」というふうなもので交換できる、本人に會うことのメリットよりは、今、瞬時にどのような研究を発表しているかということ、これはもう各個人でも情報交換しうる状態ですし、本學會でもそれをどのようにまとめるべきかというふうなことを問題にしているのではないかと思います。IT化の時代への對應というのは、今まで出しておりましたように、論文を発信するには、少なくとも英文にしてどんどんと出していく、向こうから来たものもみんな情報として提供していく。情報で提供されるのは各研究室や個人でやっていたのがいいと思いますが、國際交流の方面ではどういふ人物を呼んだり派遣した

りするかというのは、わが東方學會でやっていることですので、そういう點を一層強化することではご異論はないかと思ひます。つぎの組織の擴大強化とあわせて考えますと、こちらから出ました論文作品類を何らかの形で英語に――英語だけではないのでしょうけれども、世界共通の言葉によって、提供することを、この學會としてやっていいのではないかと考えます。

それに關連して、本學會はずっと以前から翻譯センター的な役割を持っていたわけですが、そういう多量・高質の情報を流していくのに、學會が積極的に委託を受けて、そういう情報を提供できるようなセンターとしての役割を果たしていくことが、提案として一つございます。

ただ、皆さんにご意見を伺わなくてはいいのですが、經營組織の擴大ということがあります。事業の擴大という意味から申しまして、今の財政状態や運営状況から見まして、もっと學會として果たすべきことは何なのか。

會員の方々の論文を推薦していくというやり方は、毎回やっております學會賞的な形のもの。これを擴大して然るべき形で發表す

る、出版する。學會員の出された成果を、ただ英文に直して外國語に直すだけでなく、出版事業みたいなものも、ここで興すか、ということですね。

しかし、今二つのことの、一方の學會賞的なものについて。あちこちで何とか賞、何とか賞といっぱい出してあります。學會ではなくても、朝日賞とか西日本何とか賞とか、ある中でそういう各種賞の推薦母體になるかどうかをも含めまして、そういうふうにして會員自體を高めていくような形でやっていくようにするか。それからもう一つは、出版事業までも引き受ける。これは各大學でどこかしこも皆やっておりますので、何を選んでこの學會の出版物とするか、ということがあります。これらが會員を増大させることにつながるか。學會の活動を活発にするか、ということになるのです。

ありふれたことですが、會員はやはり先生方のご推薦。推薦方法は變えない方がいいと、私は前から思っております。基礎となつて各學會または研究室を代表していらっしゃるわけですから、積極的に若い研究者を推薦していただいてやっていく。それから、先ほど出ましたように、いろんな役職を

たくさんこしらえて、皆さんに分擔して協力いただくということが變わらない學會運営です。

ただ一つ、今もう一度申し上げますけれども、國際交流やIT化時代というもので、情報を発信するのにこの學會が果たしていく役割を積極的に取り組むかどうかということですが、これも、そういうことをいまい少し皆様方に提案したいと思っております。

そのIT化時代への對應、國際交流の推進につきまして何か、この點は缺けているではないか、とかいふうなことでご指摘がございましたら、ご意見伺いたいのでございますけれども。

齋藤 「東方學」、前から思っているのですけれども、先ほど田仲先生が學會賞をとつたような論文はぜひ英語に譯して発信したらよろしい、とおっしゃった。たしかに「東方學」は、非常に査讀がしっかりしている。このような厳しい査讀をへて掲載された論文の多くは、どこへ出しても恥かしくないもので、國際的にも最先端の研究成果と認められるものが少なくない。ですから、それらの一部であれ、英譯して発信するというのは大きな意味がある。日本の東洋學研究は……日本

關連の研究にしろ中國學にしろ、インド學・佛教學にしても、最先端の仕事を行っているというのには紛れもない事實だと思ふのです。

ところが残念ながら、日本に傳承された一次資料は讀むけれども、二次資料は讀まなくていいみたいな風潮がある。そのような研究は本當の意味での東洋學研究にはならないのだということを理解してもらうために、こちらも最先端の仕事を外に発信していくというのはいきわめて大事なことだと思ふのです。

戸川 確かにその氣になったら人材を確保しなくてはいいですね。

齋藤 一つの問題提起として受けとめていただければと思います。

池田(温) 日本人の會員でない外國人の著作でも、東方學、アジア研究に非常に有益で、しかも、ほかで出版しにくいというようなものは東方學會が引き受けて刊行する。それは英文であっても日本語、漢語(Chinese)であってもいいと思います。そういうことも將來は、もちろん財政的な點を無視してはできませんけれども、希望として、そういう方向も考えていいのではないでしょう。

現在は ACTA ASIATICA の英譯や翻譯

サービス、「東方學」英文要旨のネイティブ・チェックのための専属の方はそう暇がないでしょうから、そういう有能な翻譯者をこれからスカウトしなければならぬ。経費もかかりそうですし、すぐにはなかなかできないかもしれないけれども、將來目標としては當然翻譯センター的な機能も。

柳瀬 ちょっと補足させていただきますが、翻譯サービスをやっているのですけれども、これは實に大変なこととして、翻譯の世界で本當に有能な人というのは一人か二人ぐらいしかいないのですね。だから、翻譯というものがどんなに難しいか、特に人文科學で本當の意味でしっかりバックグラウンドがわかって、よく調べて、ゲスワークをしないで作る人というのはとても少ないのです。

昔、東方學會は、東大の久松潜一先生のところで勉強していたサイデンス・テッカー氏に頼んで先生ご自身の論文を英譯してもらったことがあるのです。ワンワード五圓か何かで支拂ったのですが、それは學生である期間だけで、ある時期に來たらもう他人の書いたものの翻譯などしないのです。優秀な人ほど人の翻譯は嫌がるわけで、絶対に繼續性がないのです。たまたま東方學會はロルフ・ギープ

ルさんという得がたい人と出會って、それで専屬契約をいち早く結んで確保し、何とか賄えていたわけです。

つまりお金さえ出せばいい翻譯者が集まるというものではありません。ところが學術振興會なんかは、モデルは自然科學になっているので、ネイティブ・チェック料だけ拂えばいいだろうということなのです。自然科學はそれぞれ自分たちで論文書きますから、きちんとしたところだけはネイティブ・チェック、その分は拂いますよ、ということをやっているのですね。だから東方學會もネイティブ・チェック料は六十萬ぐらいも払ってはいらなくていいのですが、そんなもので足りるわけがないのです。人文科學は丸ごと翻譯しなくてはだめなわけですから。これはきわめて難しいことですね。

もう一つは、例えば ACTA ASIATICA ですが、昔は日本人の業績を海外に発信することでもよかったわけです。むしろ顔が見える日本、とか日本の學術をとにかく海外に、発信しろということで、文部省も學振もその立場でいたのです。

最近はずっときまして、なぜこの ACTA ASIATICA は日本人の業績ばかりしか載せ

てないのだ、というふうに変わってきたのです。ですから、將來、例えば宋代史研究というものが ACTA ASIATICA の特集を編むのであれば、その中に日本人は三人、あと二人は外國人を入れなくちゃいけない、というふうに変わってくると思いますね。

ただその場合、そう變わってきたときに、今まで五編の日本人の論文を譯さなければならなかった翻譯者が、二人外國人が入ることによって二分浮くわけです。だから、その力をほかへ回して、ほかのものを翻譯してもらうということはあり得ると思う。例えば齋藤先生がおっしゃったように、東方學會賞をとった、あるいは「東方學」のいい論文を英譯して何らかの形で海外へ出すという餘裕は出てくるかもしれない。いずれにしても、日本人のものを海外に発信する、という時代ではなくなっている、ということは言えると思いますね。

優秀な翻譯者はそんなにいないのですね。翻譯だけで食べていって、しかも少しづつ單價が上がっていった、定年のときに定年退職金程度のものが出るような形で一生を保障してあげる、という制度は、どこにもないので、つまり、翻譯は全部、アルバイト作業

なのです。それで、東方學會では、それだけはやめようと思って、専屬契約をして生活の不安は一切ない、という形に持っていっているのです。そういう點で人文科學の翻譯というのは難しい問題で、これは簡単に解けるものではないと思います。

小川 IT化について些か申し上げたいことがあります。要するにウェブサイトにアトラクティブじゃないのですよね。もっと見た瞬間に、あ、おもしろそうだ、というようなものでないといけない。だからウェブデザインという、そういう専門家がいてくれるわけですよ。そういう人を頼んで、それなりに投資をして、若い人が見たくなるような魅力がないといけないんじゃないでしょうか。

河口 いま改定中です。

小川 それはぜひお願いしたいと思います。

それともう一つは最近、論文をアップするということが、がよくいわれています。そうしますと、わるい言葉で言うところ、常にバクられる可能性があるわけです。しかも、アジア研究では、はっきり言って著作権なんか全然興味がないという方々が、ありていには多いわけですから、その邊はかなり注意しな

いといけないと思います。

東大でも、「紀要」を全部、これは日本語のままなら日本語のままですが、アップするという話がありました。理科系などはもちろんそういうもので發表するのが当たり前になっており、プラオリティも保證されますから、その傳で文科系にも入ってきたと思います。例えば東洋文化研究所の刊行物で申しますと、「紀要」はいいということになります。自分の論文をアップしないそれに載せない自由は保證する、ということでは着きました。ただ東洋文化研究所情報センター叢刊のように、他大學の方の原稿をいただいで、出版しているようなものをアップしますと、そのまま丸ごと複製を作られかねないということもありますし。ただ、出せば必ずやられますから、やろうと思えば幾らPDFファイルにしても、何だってできるわけですから、その邊は検討してからやらないといけないと思いますね。

徳永 技術はあるのですよね。撮ろうとしたら歪んでしまっただけで読めないというふうな。そういう技術はちゃんとできるのですけれども、やはりちょっと金がかかる。

小川 それはまた、簡単にクリアできるわ

けです。

徳永 そうですね。頭のいい連中ならできるでしょう。でも、電子圖書館は今ではもう珍しくありません。

戸川 ですから、そういういまや豫測をこえた状況の中に研究情報もさらされているのです。世界に向けてのわが東洋學は存続していけるのでしょうか。

どうもありがとうございました。

午後五時四十分 閉會

文責者 戸川芳郎

平成十八年九月二十二日

於 東方學會

(注) 會長・理事長に関する記述(一三一頁下

一三六頁下)は、座談會後、池田溫、五十嵐洋

子兩名が協力執筆した。

座談會出席者一覽 (①專門 ②現所屬)

- | | | | |
|-------|--------------------------------|------|------------------------------|
| 池田 溫 | 一九三一年生。①中國古代中世史 ②東京大學・創價大學名譽教授 | 德永宗雄 | 一九四四年生。①インド學 ②京都大學 |
| 池田 秀三 | 一九四八年生。①中國哲學史 ②京都大學 | 狹間直樹 | 一九三七年生。①中國近現代史 ②京都産業大學 |
| 小川裕充 | 一九四八年生。①中國繪畫史 ②東京大學東洋文化研究所 | 濱下武志 | 一九四三年生。①中國近代史 ②龍谷大學 |
| 木田章義 | 一九五〇年生。①國語學 ②京都大學 | 平田昌司 | 一九五五年生。①中國語學 ②京都大學 |
| 糸川光樹 | 一九三二年生。①日本文學 ②明治學院大學名譽教授 | 村井章介 | 一九四九年生。①日本中世史 ②東京大學 |
| 齋藤 明 | 一九五〇年生。①インド・チベット佛教學 ②東京大學 | 柳瀬 廣 | 一九三七年生。②東方學會事務局長 |
| 桜井由躬雄 | 一九四五年生。①東南アジア史 ②東京大學名譽教授 | 吉川忠夫 | 一九三七年生。①中國中世史 ②京都大學・龍谷大學名譽教授 |
| 田仲一成 | 一九三二年生。①中國演劇史 ②東洋文庫 | | |
| 戸川芳郎 | 一九三一年生。①中國思想史 ②東京大學・二松學舍大學名譽教授 | | |